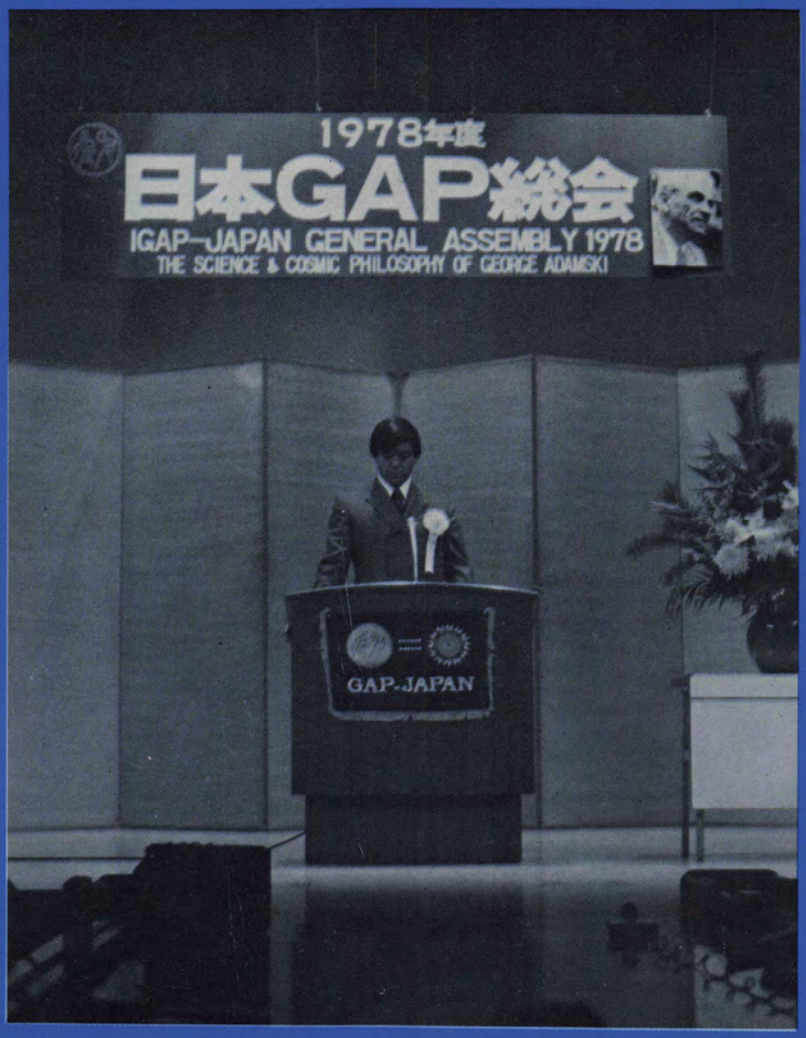
UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニューズレター

No.66



GAPニューズレター　第66号目次

〈巻頭言〉真　実…1
〈講演〉アダムスキー哲学の偉大さについて
スティーブ・ホワイティング…2
〈写真〉GAP総会会場上空の円盤…13
ジョージ・アダムスキーの思い出　キース・フリットクロフト　メイ・フリットクロフト…14
幻影と巨石の国へ②久保田八郎…17
ヨーロッパ・エジプト紀行
各地支部総会行事報告…34
〈写真〉火星人の顔？…35
会員の声…36
〈予告〉昭和54年度・日本GAP総会…38
日本GAP各地月例研究会案内…40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共禁無断転載。

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて〝コズミック・パワー〟の子であり、そのパワーの諸法則や宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。

■表紙写真は1978年11月19日、日本GAP総会で講演中のスティーブ・ホワイティング氏

真実

かねてから米ソの金星ロケットによる探索結果として、金星の表面温度が数百度の高温のために人間の住めるような環境ではないかのごとき情報や噂が流布されており、そのためアダムスキーの説を欺瞞とする風潮があって、我々の活動も阻止されたかの観を呈していた。

大衆が大国政府の声明を鵜呑みにする傾向は今に始まったことではない。巷間によく知られている例としては、第二次大戦中に日本国内に流された、でたらめきわまりない〝大本営発表〟なるものがあり、これによって国民は太平洋戦争後半における大敗に次ぐ大敗をすべて勝利と確信し、更に婦人の竹槍部隊が全国的に組織され、軍事教練が実施されていた。戦闘帽にモンペという姿の婦人たちが、銃のかわりに竹槍を手にして寺院の境内で、在郷軍人の号令下に突撃訓練をやっている光景をニタニタ笑いながら見物していた一青年の記憶はまだ薄れない。「アメリカでは男が大量に戦死して少数となったため、女子学生が戦闘機を操縦して日本空軍を相手に壮絶な空中戦を演じている」という情報を耳にしたこの青年にとって、原始的な竹槍が腹の底からバカバカしく思えたのである。

だが竹槍を嘲った自由主義者の青年も軍部にかまされていた。実際には米女子学生が空中戦に参加した事実はなく、一部の娘子軍が飛行訓練を受けていたという程度にすぎなかったのである。

ことほど左様に当時は彼我入り乱れてデマや虚報による情報戦が展開した。特に軍部の発表は絶対に真実だと思い込まされた日本国民は、完全に一種の催眠術にかけられていたと言えるだろう。

大衆は盲目である。これは現在も変わらない。政府の言明を正しいと信じ込ませることはきわめて容易である。権力者の声明を歓呼して迎えながら、あとになって苦い思いをした例は枚挙にいとまがない。一体に政界とは百鬼夜行の世界であって、おおやけに真実を述べる政治家は皆無といって過言ではない。最近出た「月刊ペン」誌二月号の「福田退陣に示された教訓」と題する記事を見ると、昨年の政変の内幕がよくわかる。アメリカその他の国も例外でないことはウォーターゲート事件でも察知できる。

なぜウソが罷り通るのか。

要約すれば、地球人はテレパシックな感知力を持たぬからである。したがって知識情報に頼るしかなく、必然、心の推理力のみを働かす。しかし心は全能ではない。信・不信の両極端間を揺れる振り子みたいなもので、主として外界からの影響に左右されるのである。Aがこうだと言えば、ああそうかと信じ、Bが違うと主張すれば、なるほどと思う。内奥に宿る〝宇宙の意識〟から真実の啓示があっても、それに耳を傾けないで、常にフラフラした状態にあるのが心である。

こうした大衆に為政者が事実を語っても無意味だろう。むしろ真相を隠蔽しておくほうが賢明かもしれない。なぜなら人間には未知の事柄に対して恐怖しやすいという傾向もあるからだ。

いま仮に米政府が金星に関する真相を突如公開したとする。金星にはすばらしい文明が存在し、金星人は精神的に地球人をはるかに凌駕するほどの偉大な発達をとげていると。

どのような反応が出るだろうか。結果は判然としている。世界中の大衆がこの声明に大喝采し、金星を模範とすべく物心両面で一大革命が生じるかというに、逆に大恐慌が発生して収拾のつかぬことになるだろう。なぜなら大衆は恐怖するからであり、声明を認めたとしても価値観に大転換が生じるからである。しかしその前に、米政府は欺瞞工作を展開したとして敵側はこれを激しく非難し、その混乱に乗じて自国を有利に導こうとする大国も出現するだろう。

アメリカが金星に関する真相を公開しない理由の一つに、金星では貨幣制度のない物資の平等分配による理想社会が存在するという点にあると思われる。これは共産主義国の絶好の付け目であって、これにより米国はイデオロギー政策で大失敗を招くことになる。これを米首脳部やトップクラスの科学者が恐れていることは明白である。逆にソ連が金星の実状を発表してもアメリカは猛烈に攻撃するだろう。共産主義者の宣伝に乗せられるなと。そこで両大国とも金星の表面温度を数百度と称して大衆の眼をそらさせておこうとするのである。

世界の現状からみればこれは妥当な方策だとも言える。ちょうど戦争中の〝大本営発表〟で国民がだまされながらも、一方では強固な団結力を保持したのと同様である。

とにかく近隣の惑星に関する真相が公表されるのは遠い先のことだろう。人為的な大動乱の発生を極力防止して、人間の精神が発達する方向に足を進めない限り、真実は隠蔽され続けるだろうが、そのほうが良いのかもしれない。

人間は意外に弱く、脆くて、信用しかねる存在だが、厳密に言えばこの場合の人間とは人間の〝心〟と解すべきである。大自然とともに生きる動植物に比較して、人間の心ほどいい加減なものはない。思考力というすばらしい道具を与えられながら、それに振り回される結果となった。そして一般における人間研究は精神の分野で退廃してしまった。

しかし悲観は禁物である。少数ながらもわれらの同志により、意識と心との関係について着実な探究と実践が行なわれており、宇宙に対して開眼しつつある。でたらめな情報に惑わされることなく、自己のテレパシックな感受力の開発に研鑽している、このすばらしい人々の努力はいつか結実するだろう。

狭義に言えば、こうした努力は個人の良きカルマの形成であり、一般大衆の知らぬ偉大な惑星への転生の契機となるものだ。したがって我々の活動は主として対個人的なものだとも言えるのである。とにかく個人の覚醒が重要なのだ。

1978年度日本GAP総会、大盛況！
会場上空に3機の円盤が出現！

アダムスキー哲学の偉大さについて

—ジョージ・アダムスキー財団と宇宙科学—

スティーブ・ホワイティング

去る十一月十九日、一九七八年度の日本GAP総会が都内新橋のヤクルトホールで開催された。出席者は約三百五十名で、宇宙の法則を探求する会員の熱気溢るる雰囲気のなかを、十時より久保田主宰者の開会の挨拶に続いて、米GAP本部より来日したスティーブ・ホワイティング氏の講演が二時間にわたって行なわれたが、その内容は深遠高次、まさにアダムスキー哲学の真髄に触れるもので、人間が求め得る救いの道として最高をゆく生命科学であり、世紀の大講演と称されるほどのすばらしいものであった。

講演中、会場は静しゅく荘厳な空気に満ちて、終始声ひとつもなく、出席者の真剣な態度により、通訳として奉仕した編者はむしろ圧倒される思いであった。

終了後、多数の方が大いなる感動をおぼえて、「このようなすばらしい講演を聞いたのは初めてだ。全く眼が覚めたような気がする」などと報告された。

この講演会には米アダムスキー財団理事長アリス・ウェルズ女史にも来日を要請したのであるが、老齢のために不可能という回答があった。したがってホワイティング氏が女史のメッセージを講演中に伝えた。

また当日昼食休憩時間中にホール上空に三機の白銀色に輝く円盤が木の葉運動を続けているのを藤井洋氏や数名の会員が目撃し、双眼鏡で確認した人もあったという。この報告については13頁を参照されたい。

以下はホワイティング氏による講演の全訳である。

日本GAP会員の皆様、こんにちは。今日ここで皆様方にお話できる機会を与えて下さったことは私にとって名誉であります。現代においてこの最も重要な話題に皆様方が関心をお持ちになっておられることに対して私は心からの感謝の意を表明したいと思います。重要だと申しますのは、それが世界のあらゆる人々の生活に影響を及ぼすからです。

しかしお話を始める前に、ジョージ・アダムスキー財団の理事長、アリス・K・ウェルズ夫人からのメッセージをお伝えいたします。ウェルズ夫人は今日、皆様方の前に来ることができないため、次のような言葉を伝えてくれと私に依頼いたしました。

「日本へ来てくれというご招待に対して心からお礼を申しあげたいと思います。こちらアダムスキー財団における健康状態や仕事などのために日本訪問は不可能になりましたけれども、想念とフィーリングでは皆様のもとに参っております。

ジョージ・アダムスキーによって私たちに立派に伝えられました宇宙の同胞愛の理解とその永遠の原理を学ぼうという共通の関心において私たちは一体です。あらゆる生命と一体です。なぜなら創造主の息はあらゆる生命体を通じてあらわれているからで、こうしてすべての創造物は現在の目的と一致することになります。

私たちの目的は兄弟姉妹と共に生き、それを理解することにあります。人間は決して分離していません。ただし生命の一体化の理解の欠乏が起こりますと分離します。これは永遠の真理であり、永遠を通じて保たねばならぬ私たちの知恵の宝石です。皆様方すべてに祝福のあらんことをお祈りします。

アリス・K・ウェルズ」

フレッド・ステックリング氏が故ジョージ・アダムスキーの生涯とスペース・プログラムの重要性について日本GAPの皆様にお話してからちょうど一ヵ年が経過しました。今日、私は日本GAPのごとき世界に各支部を有するジョージ・アダムスキー財団として知られる組織の活動と目的について少しばかり皆様にお伝えし続けたいと思います。

目標は一つの考え方にあります。その考え方とは〝一体化〟です。なぜなら一体化した努力によってこそ、私たちに与えられている知識情報を世界の大衆に到達させることができるからです。そのときこそ、それが自分の歩みたいと願う道であるならば、各人が自分できめるためにその知識情報が与えられることになります。

ジョージ・アダムスキーは何を説いたか

しかし最も重要なのは別な惑星に住む人々によってもたらされた宇宙哲学または宇宙科学でありまして、これを今日、皆様方にお伝えしたいと思うのであります。

それは普遍的な（宇宙的な）哲学でありまして、どこに生命が存在しようともあらゆる生命にあてはまるものです。それらは（宇宙哲学や宇宙科学は）時代の夜明け以来、人間が住んでいる世界と人間とを支配してきた生命の法則です。

しかしここで少し話をもどして、ジョージ・アダムスキー財団の簡単な背景と各種の活動や目標についてお話したいと思います。

私たちの世界は過去にも現在にも大きな動乱の中にあり、各国の国民のほとんどの頭上に政治的・経済的な不安という脅威がのしかかっています。人は、社会が要求するようなペースについてゆくために自分や同胞が日常耐えている緊張を感じることもあります。私たちがホームと呼んでいるこの惑星の表面を傷つけて無数の生命を奪った二つの大戦争が発生したのは、そう遠い昔のことではありません。科学、軍事力、宗教、経済などの大いなる手が人類にくだっており、そのいずれもが異なりますけれども、たしかに互いに結合したものであり、互いに作用や政策などで影響し合っています。

私たちがみな生まれたのはこのような世界であり、他の惑星で生かされ応用されている具体的な科学や社会哲学の知識をジョージ・アダムスキーが私たちにもたらしたのはこのような時代なのであります。

ジョージ・アダムスキーはその最後の講演において、人々に次のように強調しました。すなわち、他の惑星に見られるのと同じタイプの社会を作り上げるために私たちが持っているあらゆる力や条件を私たちも用いるべきである、と。ただしその知識を正しく応用しなければだめである、と。科学の分野において私たちは偉大な進歩をとげてきましたが、共に生きようという人間の能力は昔の時代からさほど変化していません。そこでアダムスキーは、人間は自分自身を知るべきであり、自分を知ることによって同胞を理解し、平和が到来するのであると強調しました。

これは終わりのない仕事ですし、だれしもこれを達成するまで生きられるわけではありません。こうして一九六五年四月二十三日、五十年以上にわたって自己の体験による宇宙の真理を大衆に伝えた後、ジョージ・アダムスキーは亡くなりました。

一九六五年四月二十四日、アダムスキー氏を三十年以上も親しく援助したアリ

●会場受付

ス・K・ウェルズがカリフォルニア州ビスタのアダムスキーの家からワシントン市へ飛び、アダムスキーの遺体に関する最終的な処置をとりました。

当時、いわばアダムスキー氏を知っていた、そして氏がもたらした知識情報を大衆に知らせ続けることのできる協力者のグループを形成することについて種々の計画が論議されました。今日、私たちは他の惑星から来る訪問者たちによって伝えられた理念や哲学を広め続けております。私たちの主な関心は、与えられた知識を変えたりゆがめたりすることなしに大衆がみずから選ぶ機会を大衆に与えることにあります。

ニセのコンタクト・グループに惑わされるな

どんな新しい考え方にしてもそうですが、それが大衆の注意をひくとまもなくだれもがその一部分になりたがるようです。多数の促進者は、大衆が関心をもつことによって起こる新しいブームに対して金銭的な利益がもたらされるのを見ました。当然のことながらアダムスキー氏の死後、このような多数の人がアダムスキーの体験に関するあらゆる事を自分も体験したと主張し、またアダムスキーの名のもとに活動を続けているのだと称しています。

この活動は常識と事実にもとづいたものの一つです。人間の生き方というものは、それを実行に移すとすれば、世界中の人々に心の平安、精神の平安をもたらし得るような、実行可能な生きた形の一つです。それは宗教に関係なく、派閥争いでもない一つの哲学であり、一グループが他のグループをとやかく言ったりするような性質のものではありません。それは宇宙的（普遍的）なものです。

よく次のように言われます。

「宇宙的とは何か？」「絶対的とは何なのか？」

人間が信ずる事や意見などに関係なく、人間の思想や行為で変えることのできないものが宇宙的です。今日あらゆる宗教や信仰や哲学が世の中に存在していますが、そのいずれも真の平和や調和の状態を世界にもたらしていません。しかしそれらのいずれも教理の中に多少の真理や良い点を含んでいます。長いあいだ地球の人々を苦しめてきた悲痛事は、今日も大衆に恐怖と悲惨事をもたらし続けています。

イエス、仏陀、孔子、マホメッド、その他多くの人によって教えられた生き方は、注意深く調べてみますと、ほとんど同じ考え方を含んでいることがわかります。こうした基本的な考え方は宇宙的な（普遍的な）真理であり、それは常にコンスタントに存在し、人間が認めようが認めまいが、人間の生活に影響を与えます。

人間がより良き世界を作りあげるために結束しようとするのを妨げているのは無知と不寛容にほかなりません。私たちは今日見られる難問題や闘争の多くを促進している上でたしかに罪があります。

そうです。世界の各国政府はこうした新しい考え方に対して眼を開いていないと言えるでしょう。しかし人間はそれをどのようにして知ることができるでしょうか？　私たち大衆は実際にその新しい考え方を試みたでしょうか？　隣人たちが私たちについて何を考えていようともそれは重要なことではありません。このことが、私たちが真理を生かそうとするのを妨げているのではありません。それで、もし一個人が生きた実例となるならば、その人は言葉で多くを語るよりも、もっと多くの人々の精神や心を変えることになるでしょう。

古いことわざがあります。それは「すべてが語られ、行なわれた後に……」という言葉で始まりますが、これは次のように終わるものとしてもよいでしょう。「すべてが語られ、行なわれた後に、行為よりもまだ多くの言葉が残る」。個人の生活、家族、社会、国家、世界において、変化をもたらすものは行為です。私たちはすでに多くのことを語りつくしているのです。

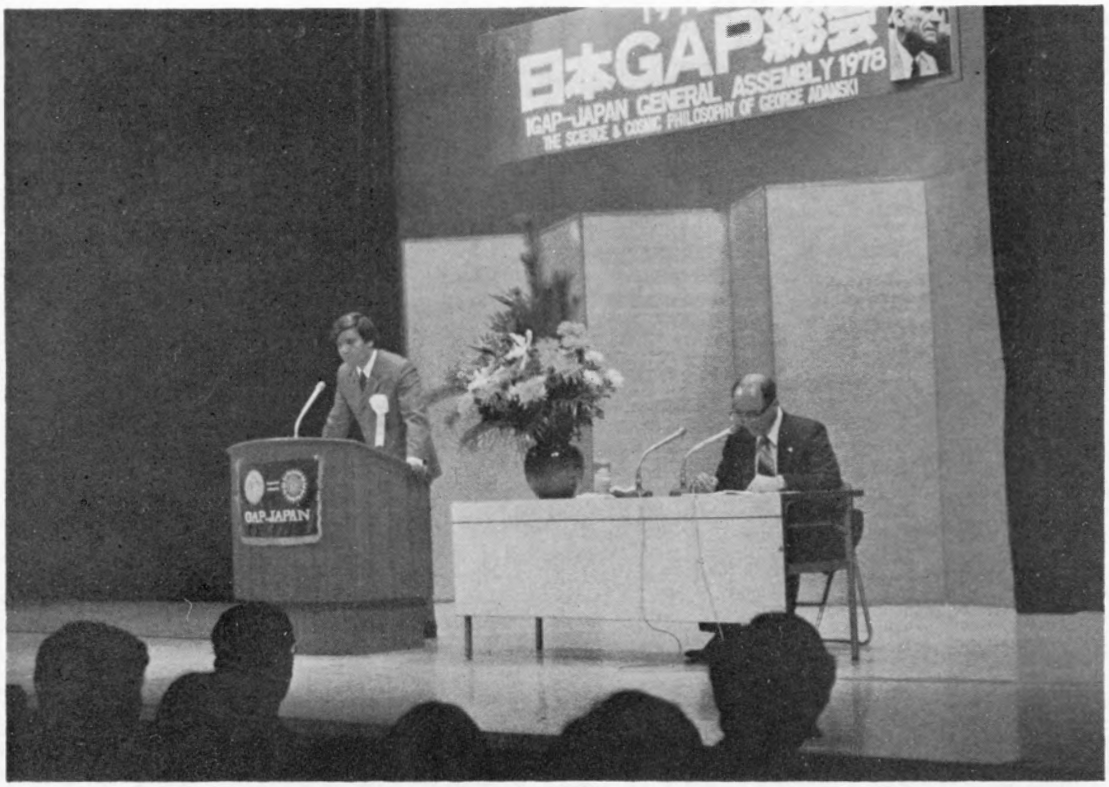
まず他人に奉仕をせよ

私たちがだれに話しかけようがそれは問題ではありません。どんな人でも自分や家族のために最上の状態を望みます。生活状態の改善を求めて苦闘するのは当然です。また、どんな人でも精神的な理解力と心の平安とを求めていることは間違いありません。しかも人間の生活におけるこの二つのものは互いにつながっており、一方がなくして他方を求めることはできません。たとえば、貪欲と利己主義の生活を送りながら、どうして人間は心の平安を持つことが望めるでしょうか？　このことは最もむつかしい事かもしれません。「自分が他人からしてもらいたいと思う事を、まず他人にせよ」という原理は、あらゆる主な理念の基礎となるものです。それはまた宇宙的な真理です。

人間が何を信じ、それにどのような名称を与えようともまず問題ではありません。名称というものは人間を分離させて互いに敵対させるにすぎません。それよりも人間が何を生かしているかが問題です。生かしていることにおいて最後的な結果があらわれるのです。

私たちの世界はたいそう小さな住み家であり、常にそれは小さくなってゆきます。何ヵ月も要したかもしれないような旅行も、今は数時間で行なうことができます。そう遠くない昔、友人か親類に会うために百マイルも行くことは大仕事でした。今は、たとえば東京で金曜日の夕方に飛行機に乗って、ロサンジェルスで夕食をとり、ロンドンで次の朝に朝食をとり、月曜日の朝に仕事に間に合うように帰宅することができます。控え目に言ってもそれはきわめて安全な旅行であるばかりでなく、今は可能でもあります。

もはや私たちは遠隔地のことを聞くだけで困難に思う必要はありません。旅行、雑誌、映画、テレビなどの媒体を通じて一団となることができるのです。しかるに私たちはいまだに人々を東洋人または西洋人、アメリカ人またはインド人、仏教徒またはカトリック教徒などと考えま



●講演中のホワイティング氏。右は通訳中の久保田。

す。私たちはみな人間であり、惑星地球に住む家族の構成員であるとみなさねばならぬ時が来ているのです。

偏見や嫌悪の態度は、同胞の文化や習慣を理解しようという欲求と代えねばなりません。

私たちは変化の時代に生きていますがその時代は長く続くでしょう。なぜなら人間は古い既成の概念を変えようとはせず、より善き物事を求めようともしないからです。

スペース・ピープルの哲学とは

これまでに何度も次のように尋ねられたことがあります。

「他の惑星の人々の哲学とはどんなものなのか？」

これは今のところ、すぐに答えるのはむつかしいのです。しかし基本的な原理に少し触れることはできるでしょう。もし実行に移すならば、それは現在他の世界で楽しまれているのと同じタイプの平和な幸福な生活を、結局は私たちにもたらすでしょう。

スペース・ピープル（注＝友好的な他の惑星の人々の意。スペース・ブラザーズ、スペース・シスターズともいう）は生命のあらゆる面に対して大いなる尊敬感を持っていると言えるでしょう。というのは彼らは一つの面でも欠けるならば自分たちが生きられないということを認識しているからです。彼らは自然界とその機能を綿密に研究しています。彼らは、自然界が諸法則を持っていて、それが破れるとひどい結果になることを観察しています。これは地球でも明らかです。人間が自然のバランスを長く破れば、自然は地震、ハリケーン、その他多くの暴風雨のような現象によってそむきます。また人間も自然界の一部であり、健康な長い生涯を楽しもうとするのなら、その法則に従わねばならないということに彼らは（スペース・ピープルは）気づいています。

多くの人は、他の惑星ですごしているといわれる長い寿命を事実として容易に認めようとはしません。しかしこの地球でも科学者たちは、建設的見地から、人体は現在よりもはるかに長く生き続けることは可能だと言っています。

大抵の病気は圧迫、緊張、感情の結果であるということを医学にたずさわる人々が認めています。この同じ緊張や感情が肉体の老化と健康に直接に影響を与えているのです。私たちはあらゆる解答を見い出そうという希望を持つ前に、進まねばならぬ長い道があることはたしかですが、しかしいつかは、もっと早い時期に、肉体を引き裂いて死に至らしめている想念や感情をコントロールすることによって、私たちは自分で多くの事を達成できるようになります。

至上なる英知を見い出すこと

自然界を研究することによってスペース・ピープルは、あらゆる生命には終わりがないことも見い出しています。毎年自然は新しい生きものを送り出すことに

よってみずからを新生させています。形は新しくても同じ永続的な生命です。毎年春になるごとに、自然が生命の火花を表現させようとして形ある物を新生させるのと同じように、人間もそうしているのです。私たちが死と呼んでいるものは、一の形態から他の形態への転換です。これは春の季節が来るごとに自然が古い物を新しい物に変えるのと同様です。

人間は、人間の起源や、我々の知るこの世を去るときに人間はどうなるのだろうか、などを長く地上で考えてきました。西洋の哲学ではこの新生の過程を復活と呼び、一方、東洋の哲学はこれを転生と呼んでいます。両方とも同じ意味で、帰って来ることを意味します。

人間は自分が見たり触れたりできるものをまず理解します。こうして人間は自分の肉体と心を観察します。なぜなら人間は考えたり推理したりすることができるので、自分の肉体を見たり心の存在を知ったりできるのです。しかし人間は心と肉体を支えている英知についてはほとんど何も知っていません。

この英知とは、心の知識なくして肉体のあらゆる機能をコントロールする英知ですし、心に推理させたり考えさせたりする英知でもあります。しかも人体の創造において必要な複雑きわまりない過程に関する多くの知識を人間が持たなくても、息子または娘という形で人類を再生させるのと同じ英知でもあります。

この英知こそは人間にとって唯一の真の永遠の一部分ですから、私たちが知らねばならないものです。この英知なるものは人間の周囲のあらゆる生命でもって人間を一体化させる一部分です。なぜなら人間の心と肉体を支えるこの同じ英知が、現在人間に知られているか、または知られていないあらゆる生命の分野をも支えているからです。

私たちは英知すなわち魂が存在することを知っています。人間はできるだけその英知を見い出そう、またはそれについて知ろうという絶えまのない衝動をもっているからです。世界のあらゆる哲学や宗教は、人間の本当の魂について、もっと多くを知りたいという人間の欲求にもとづいています。人間が自分自身を知ろうというほどに大きな内部の衝動は他にありません。だからこそ、多くの哲学で「人間は自分自身を知らねばならぬ。そうすればすべてがわかるだろう」と書かれてきたのです。

長い時代を通じて大師たちがこうした言葉を伝えたとき、大師たちはたしかに心(マインド)については述べませんでした。なぜなら心というものは知られねばならない事柄に比較して、ほとんど何も知っていないからです。したがって、大師たちは心と肉体の背後にある魂すなわち英知について話していたにちがいありません。

私たちがこの英知なるものをもっと良く理解するためには、自然界に返ってこれを研究する必要があります。なぜなら私たちはこの英知の働きについて、他のどこよりも自然界でよく観察できるからです。自然界の働きやその働きの理由などを調べることによって、私たちはそれを働かしめているものについて知ることができるのです。私たちも自然界の一部ですから、私たち自身の詳細な研究も必要です。これこそ「汝(なんじ)自身を知れ」という意味です。ひとたび人間が自分の心を静めて充分に聞き耳を立てさせるならば、無限の知識の貯蔵庫を与えてくれるのがこの至上なる英知なのです。

いかに生きるべきか

人間はいかに生きるべきでしょうか？これは、人間が生きるために創造されたのではないとは到底考えられないことをみれば、この疑問に最もうまく答えることができます。不安、嫉妬(しっと)、憎悪(ぞうお)、好き嫌(きら)いなど、これらすべては肉体内にアンバランスな状態をつくり出します。これを長く続けるならば、健康上ひどい問題を起こします。したがって、人間はこれらの想念を持ちながら生きるように創(つく)られたのではないことがわかります。ところが一方、もし私たちが平安と満足の想念を持つならば、肉体は故障なしにその機能を遂行しますし、病気その他の肉体的苦痛からのがれることになります。各人は心の中にそのようなタイプの想念を保ちたいと願うべきです。その想念が病気や苦痛という結果よりも良き結果をもたらすのです。

科学によれば、あらゆる細胞はそれ自体の英知を持っているということです。各細胞は人体内で遂行するべき特殊な義務を帯びており、しかも他を妨害したり自身の自由意志を持ったりしないでそうしているのですが、これはむしろ宇宙の英知の指導下にあるのです。私たちの心が聞き取らねばならないのは、この小さな細胞の〝心〟です。それが意識と直接に接触しているからです。

また私たちにわかっているのは、肉体の細胞は私たちの想念や感情によって影響を受けるという点です。したがって非常に重要なのは、なにがなんでも不自然な状態を起こさせようと心の意志が絶えず主張することによって常に支配的になるかわりに、心を静めて受容的にさせながら、人間がもっと自然な生き方に返ることにあります。

自然の中では万物が平安と静けさのなかに遂行されており、物体は来ては去り生と死が行なわれていますが、周囲の生命は変わらぬままにあります。常に騒いで、未来について不安なのは人間だけです。

心を自然と同じように落ち着かせるためには、私たちは平安と調和の法則に従って働く必要があります。私たちは自分の肉体を秩序ある状態にして働き始めることができます。前にも申しましたように、各細胞は心を持ちますが、この心はいわゆる活動の中心であって、宇宙の英知に支えられています。細胞の活動を模倣するのは人間の心の義務です。もしそうしなければ人間は病気というかたちで代償を支払います。肉体の各細胞は異なる働きをしますが、人体内の無数の細胞は肉体を一単位として維持するために互いに調和して働いています。しかしこの肉体だけで生きる人は同じ平安と調和に

よって自分の生命活動を行なうことができず、そのために摩擦が生じ、この摩擦が病気をひき起こします。

人間は自分の手で作られるか、または破壊されます。人間は自分を破壊する好き嫌いという武器を作り出します。破壊的な感情により、私たちはあたかもナイフを心臓に突き立てるように自分自身を殺しているのです。

人間は自分の性格の作り手であり、生活の鋳造師であり、運命の建設者です。人間は常に主人です。無知のまま働いて生命に反しているときでさえ、人間は生活を誤用している愚かな主人であり、自分や周囲の仲間に苦痛をひき起こしています。

以上のことが他の惑星の考え方に対する基本的な法則です。自然を観察して自分の生活をこれに見習わせるようにして下さい。

まず自分がスタートしなければならぬ

多くの人は、これはたいそう困難だと言うかもしれません。非常に多くの物事を要求する社会に私たちは住まなければならないからです。これはたしかに本当です。人間は自分自身や家族のために生計を立てるべく毎日多くの時間をついやさねばなりませんので、自分を向上させるための時間はほとんどありません。しかし何とかして私たちはこれをやらねばなりませんし、最初はほんの少しの時間でも利用する方法を見い出さねばなりません。あらゆる物事は結局バランスが保たれねばなりません。むりやりの活動の時間中にも、ゆったりする時間が必要です。これを始めるのに最良の場所は、私たちの家庭でこうした環境を確立することにあろと思います。

一日の仕事を終えて帰ったとき、私たちの家庭はその日の抑圧や緊張をなくして、平安と幸福の環境を反映しなくてはなりません。しかしどれだけの家庭がこの種の雰囲気を持つでしょうか？　何度となく子供たちは他の子供にむかって金切り声をあげ、奥さんは子供たちのために心を取り乱し、子供たちは母親にくってかかり、主人が帰宅したときは一日の難儀な仕事と抑圧のためにいらいらしています。だれもがそのような状況を改善しようとしないで、互いに非難し合っています。人間は互いに助け合うように創られたのです。唯一の困った問題は、だれもが、だれかがやってくれるだろうと待っていることにあります。あなた方が自分の望む物事の中心なのですから、あなた方がそのスタートを切らねばなりません。だれもがそんなふうに考えるならば、その行為はあらゆる人に等しく伝わります。

こうした生き方は理想的であって現実的ではないと言う人があるかもしれません。しかし理想と現実の間にどんな相違があるでしょう？　この二つをどんなふうにして分けますか？　現在、現実化したあらゆる物事は、かつてはだれかの心の中に浮かんだアイデアまたは理念として存在する必要があったといえば間違っているでしょうか？　たとえば飛行機を例にあげましょう。近代の飛行機を作り出した先駆者であった人たちは理想家でした。彼らは飛べるという夢を持ち、数日、数週間、数ヵ月かかるよりも、数時間である場所から別な場所へ行く夢を持っていました。たしかに彼らは大衆によって夢想家、理想家とか実現不可能と呼ばれました。しかし今日、こうしたアイデアはあたり前のこととして実現しています。

過去百年間、私たちは数百度も新しい進歩の瀬戸際にありました。そしてその瀬戸際に立つたびに、先駆者たちを〝理想家〟と呼びながら嘲笑と危惧の念をもって軽蔑した人々がいつもいました。いまもこの状態は変わっていません。私たちは宇宙旅行のやれる瀬戸際にあり、もし私たちが追求し続けるならば、この計画は遠くない将来にあたり前のこととして実現するでしょう。今もなお嘲笑する人たちがいます。新しいアイデアを受け入れるのを恐れて容易に認めようとしない人たちです。しかしそれが彼らに強制されると彼らはそれを受け入れて、その子供たちは宇宙船を操縦して月か近隣の惑星にむかって連続往復するようになるでしょう。

〝愛〟の原理が最強力

ですから、これは態度の問題であることがわかります。人間は受け入れたい物事を受け入れることができるのです。なぜなら人々はあらゆるタイプの生活条件に適応できるからです。これはそうしなければいけないと感じるためです。人間は自分の生活の行動の仕方を選ぶための完全な自由意志を持つ唯一の生き物ですから、人間は本来〝創造主〟の地位にあると、ある程度言えるでしょう。そうです、たしかに環境はときには不快でしょうし、進歩向上を信じて信念を持つことは困難かもしれません。しかし、より多くの人が信念を持ち、その目標にむかって働くならば、たぶん時代は変わるでしょう。あらゆる状態を楽しくも不快にもするのは人間だけなのです。自然は人間に対してそれをやってくれません。自然は人間の必要な物すべてを与えてくれるだけです。

人間がどんな種類の生活をすごそうがそれはほとんど問題ではありません。それは私たちが周囲の他人のことを思うのに妨げとはなりません。親切さ、微笑、同胞に対する本当の関心などは、不信、攻撃、憎悪などと同様に時間や労力を必要としません。しかし私たちはこれらの一方を多く持ち、他方はほとんど持たないようです。私たちがより良き生き方を望むなら、その良き面を反映させねばなりません。各人は自分の理念を生かす価値があるかどうかの生き証人でなければなりません。これがなされれば他人も応じるでしょう。私たちは〝愛〟の原理こそ宇宙で最も強い力であることを決して忘れてはなりません。それは万物を互いに結びつける力です。それはあらゆる生命を生じさせ、再生させ、生き続けたいと願わせる、温かい吸引力です。

私たちが聞いている〝宇宙の意識〟

は、それと同じ力です。それは万物を存在させ、いつでも決して見落とすことなしに創造物を見守っています。生命とは人間がときどき振舞うようなものだとすれば、この惑星や、その表面に住む人間たちがどういう状態になるかはよくわかるでしょう。しかしそんなことはありません。生命とはそれの始まりに対して常に責任を持ち、万物が自然のバランスと自然の法則によって生み出されているかどうかを注意しています。

想念を観察して変化させよ

私たちがもっとスペース・ピープルのそれのような生活をすごしたいと願うなら、自分たちの考え方を変える必要があります。なぜなら、私たちが行なうあらゆる行為以前にそうしようという想念が起こる必要があるからです。したがって人間の不均衡な生活に起こるトラブルは人間の想念の中にあるということになります。想念こそは創造において最も強力な道具であることを記憶するべきです。私たちの周囲に見える万物は最初に想念が起こったための産物です。私たちの肉体でさえもこれと同じ方法で創造されました。私たちは受胎の瞬間に一個の細胞として出発したのではありませんか。そしてその単細胞はコードまたはメッセージを持つ必要がありました。それを私たちは想念と呼んでよいでしょう。それがあらゆる種類の複雑な部品を持つ全身を作るのです。

したがって人間が進歩を求めて生き方を変えようと願うならば、自分の想念の詳細な研究を行なう必要があります。想念の中にこそ行為の源があるのです。私たちは正直、信用、信念、誠実さなどの特性をもっと発達させねばなりません。これをなすならば、私たちの日常生活は自分が出会うあらゆる人にこのことを反映させるでしょう。そして私たちは進歩にむかって新しいスタートを切ることになります。もっと詳細にこれらの各ポイントを見ようではありませんか。しばしば正直、信念、誠実さなどについて良き言葉は話されますが、充分に理解されてはいないのです。

正直であることは、周囲の人々に対するばかりでなく自分自身にとっても最も重要です。物事の修正に対する必要をまず認めない限り、ある状態を私たちは修正のしようがありません。想念は行動のすべてが行なわれるための原因の状態であることを忘れないようにして下さい。たしかに観察者以外のだれも、私たちが心にいだく想念を知らないでしょう。しかし早晩これらの想念はそれ以上のものになります。条件や気分がよいときには、私たちはそれらの想念にもとづいて行動し、そして想念は良かれと願いながら世間にみずからを洩らします。

非常に多くの人が、ある状態は過ぎ去って行くだろうと考えながらそれを見過ごしますが、生命において本当に過ぎ去って行くものは何もありません。それは一時的に忘れられるだけです。自然はあらゆる物事の中にバランスを要求しますので、もし私たちが生命に反するような物を動かすならば（行なうならば）、私たちは完全にそれからのがれようとして、早晩その状態を修正する必要にせまられます。

人間は、他人がどのように考えようとも実際は問題ではないのに、物事を他人から隠しながら多大の労力をついやします。最後的な結果において、自分の生活を通じて行動と想念に責任を持たねばならぬ者は、自分自身だけなのです。

盲目的信念が最重要

この線にそって、生長と進歩にきわめて必要なもう一つの要素は、お互いに対する信頼、生命を支える英知に対する信頼です。かわって信頼は、信念と、喜んでやってみようという気持に大きく頼ります。私たちは、ある物事をやってもみないのに、それがうまくゆくかどうかを知ることはできません。

少し以前に、人間が今日のように宇宙空間へ出かけて行くだろうと、だれが考えたことでしょう？　この分野における先駆者やその他の人々は信念を持つ必要がありました。〝盲目的信念〟といってもよいほどの信念です。人によっては盲目的信念によって生きることは愚かで実行できないことだと言いますが、それがなければ私たちはどこにも行けません。改善しようという目的で人間の側に起こってきたあらゆる物事は、最初はだれかの心の中に想念としてわき起こる必要がありました。個人またはグループは充分な盲目的信念を持つ必要があったのであって、それによってこそ問題を追求し、ついにそれが実現したのです。

〝至上なる存在（創造主）〟を私たちに敬わせるのは、この盲目的信念ではないでしょうか？　人間は何を信じようと問題ではありません。あらゆる宗教は盲目的信念にもとづいているのです。

もし私たちが本当に正直であろうとするならば、私たちは毎日、全く盲目的信念の法則によって生きていることになるのです。私たちが行なっているあらゆる物事、たとえば作物を植えて食物をとったり、仕事に行こうと家を出かけたり、眠ったりすることなどは、すべて好結果を望みながら行なわれています。しかし私たちはその結果については完全に確信は持てないのです。

各個人の内部には、その人格が偉大であろうとなかろうとそれには関係なしに、自分自身よりももっと偉大なものがひそんでいるという感覚が常にあります。何かの状態が発生したときに、もはやそれに打ち勝てないという場合にのみ人間がこの感覚やこの信念を必要とするというのは残念なことです。おそらく人間が絶望的になる瞬間までジッと手をこまぬいていなければ、本人の生活が主として自分の無知による浮き沈みの状態に満たされることは少ないでしょう。

絶えまのない進歩のカギは信念にもとづいています。これは宗教的または霊的な意味とは関係ありません。信念とは、人生の二つの面における安定剤または平衡器です。信念は、あらゆる人が求めている知識、自信、安定、新鮮さ、永続的

な生命の理解などを生み出すための基礎そのものです。それは誤解、不信、あてこすり、非難などを必要のないものとして取り除きます。

そして最も重要なことは、信念は、エゴまたはセンス・マインドを訓練することによって、利己本位な態度を取り除きます。信念は、過去や現在を含み未来を形成する宇宙の偉大な法則の一つです。

良き習慣をもつこと

私たちがみな望んでいる良き社会を作り上げるのは、普遍的な、そして語るのに簡単なこれらの諸原理です。しかし人間がこうした諸原理を自分の生活に織り込んで、それをあたり前のことにするには、多くの古い考え方を捨てる必要があります。この古い考え方は習慣と呼ばれています。

人間は基本的に習慣から成り立っています。私たちの一日の想念や行動の九十パーセントは習慣だと言ってよいでしょう。それについてちょっと考えてみますと、私たちの日常の行動のうち、そのどれほどを実際に考えているでしょうか？日常のきまりきった行動をたどってごらんなさい。そのほとんどは昨日の繰り返しにすぎないではありませんか。これを変化させようとしても私たちはほとんど何もできません。私たちには行なわねばならぬ仕事やその他の責任があるからです。たしかに、人が習慣を続けるのは当然です。このことは高次な源泉から来る印象に対して人間の心を開かせるようにしますが、一方、私たちが調べて変化させねばならないのは、このタイプの習慣です。

どんな惑星に人間が住もうとも、人間は常に習慣を続けますが、唯一の相違は高度に進歩した惑星の人々は、自分の周囲の生命から来る新鮮さや印象などに心を開いているという点にあります。そして彼らはそのような訓練をしていますので、印象を感受するにつれて、その印象に従うのです。私たちの社会ではこれをテレパシーと呼ぶようになっています。

テレパシーによる交信または受信はフィーリングの径路によるもので、心によるものではありません。意識から心にやって来る印象を感受するには、心はそれ自体を静めねばなりません。印象が感受されたあと、今までになれている習慣的な考え方や行動にそれが合致しなくてもその印象に素直に従うだけの柔軟さが必要です。習慣というものは人間を自由にして自己の周囲の生命を探索させるはずです。というのは習慣によってこそ私たちは自分の心の知覚を応用する必要なしに、日常のきまりきまった仕事の機能を果たすことができるからで、これによりもっと重要な物事に対して心が開けることになります。しかしこの世界では、人間は自分の習慣の奴隷になっているにすぎません。習慣というものが人間に物事をさせる上でただ一つの方法だけに縛りつけており、このため本人は自由に考えたり自由に感じたりするのに必要な柔軟さを失っています。

もし私たちが憎悪、貪欲、嫉妬などの感情から成り立っている習慣の生活をすごすならば、同じ習慣にしても、もっと良き性質を帯びた別な生活をすごすこともできるはずです。習慣をつくり出すことは、それが建設的な性質のものにせよ、破壊的性質のものにせよ、同じ過程を経ることになるのです。その唯一の相違は、私たちの環境は基本的には一方的なものでありますので、したがって私たちは自分の環境と同じ考え方に急速に落ち込む傾向があるという点です。これは「最も楽な方法を取る」という法則によります。私たちは多くの場合、良かれ悪しかれ、大衆がやるとおりの事をやります。ファッションの世界または市場のいろいろな傾向をちょっとごらん下さい。もしその製造業界が新しいファッションまたは新製品を売りたいと思えば、その製品が良かろうが悪かろうがおかまいなしに、業界全体は大衆の前にそれを出しさえすればよく、そのために雑誌に広告を出したり、有名なテレビスターがそれを使っているところを宣伝しますので、まもなくあらゆる人もその製品を買わねばならなくなります。私たちはきわめて容易に影響を受けるのです。だれしも自分をあやつり人形と思いたくはありませんが、多くの面でやはりそうなのです。食べ物や着る物や生活の仕方など、すべてが大衆のすぐ飛びつくような巧みなアイデア商戦によってコントロールされ、変えられています。

自由な考え方のできる人間になるためには、私たちは状況を非個人的に調べてある行為に自分が同調するべきかどうか、個人的なものでないかどうかをみきわめて、大衆の傾向に従わないことが肝要です。私たちすべては社会に適応してそれを役立つものにしなければなりませんが、しかし社会を役立たせるためには、好き嫌いの一部分になる必要はありません。私たちは選択力を持っています。時流にそった流行であるからといって、仲間ゲンカをするようなタイプの生活をする必要はありません。

永遠の生命は、あらゆる生命の〝偉大な英知〟から人間が受け取っている贈り物です。人間がその英知と共に行なう物事は人間の仕事ですが、生命の高次な諸法則はいつまでも破壊されることはありません。あらゆる生命が機能を果たすのに必要な平安と調和を人間が破り続ける限り、自然の法則はその代償を要求しますが、私たちの世界はその代償を支払ってきました。

自分で選ばねばならぬ

人々が自分の生活を変化させるにはどうすればよいかという質問がこれまでにありました。それに対するものとして、以上述べました事が基本的なものであり、近隣の惑星から来た人々によって私たちに強く伝えられてきた出発点でもあります。なぜなら以上の事柄こそ彼らが応用し、良き結果をあげたシステムでもあるからです。

この地球の人類は平和に暮らしたり良き生活の実を楽しんだりする機会を持たないのだということを私たちに信じさせ

ようとする人もありますが、これは完全な誤りです。私たちが何を求めて働こうとも、すべての人はその求める物を持つための等しい力を有しています。しかし持つ価値のある物なら何であるにせよ、それを求めて働く価値もあるのです。

私たちが〝宇宙の意識〟と呼んでいる至上なる英知は、人間をより好みしません。この英知を最大に受け入れる人は、その最大の英知が与えられるのです。もし選ばれた人がいるとすれば、それは自分自身の意志によって英知を受け取った人であり、生命に対抗して戦うよりも逆に生命に従うことに同意した人です。自分たちは選ばれた者であると公言する多くの団体が言っている言葉は、思い違いです。なぜなら何らかの選択が行なわれるとすれば、人間は自分自身で選択するからです。人間は歩もうとする道に自分の足をのせればよいのです。

一世界をなす私たちが貪欲と権力という道に向かっていることはまず間違いありません。大抵の人は、これこそ自分に永続的な平安をもたらすものだと考えながら、手に入る物を求めて出かけて行きます。しかし実際には、あらゆる物は束の間のものにすぎません。どんなに多くの物を集めても、それらは少しのあいだ役立つだけです。早晩私たちはそれらすべてをあとに残して去らねばならないからです。もし私たちが生長できず、自我の生活から脱け切れなければ、今日、人間の内部で燃えている自我の種は、自分の達成した物事の誤用によって、いつか自分を破壊するでしょう。人間の心が同胞に対して開けるようになるまで、そして生命に対する尊敬と崇敬が現代の傾向にとってかわるようになるまでは私たち皆が望む安全と平安は私たちのものにならないでしょう。だれもが最初に火ぶたを切る人を待っています。しかし平安と幸福があらゆる人のために確保されるまでは、だれもそれを楽しむことにはならないでしょう。世界中のあらゆる人類の心と精神に重荷が負わされ続けて、戦争、飢餓、病気、破壊などの脅威がのしかかってくるでしょう。人間が行なうほとんどあらゆる物事のなかに恐怖が人間のガイドとなっており、この恐怖は人間を老いさせて、自分の時代のはるか以前にチリと化してしまい、同じ運命をたどる子孫にひきつがれます。

以上の知識は、ホーム惑星で非常にうまく応用してきたスペース・ピープルによって私たちに支えられたものです。今それを選ぶかどうかは国家または世界としての私たちのものですが、たぶん個人としてみればもっと重要なものと思われます。なぜならこの複雑な世界がどんなに大きくなっても、それはやはり人間個人から成り立っているからです。どうも有難うございました。

久保田八郎訳

（講演に続くホワイティング氏による質疑応答の全訳は次号に掲載の予定）

× × ×

編者付記

私（久保田）が初めてホワイティング氏に会ったのは一九七五年十月三十一日にカリフォルニア州ビスタの米GAP本部を訪問したときで、当時はラジオのアナウンサーをやっている若きアダムスキー支持者という印象を受けた程度だが（詳細は本誌第58号の旅行記『きらめくビスタの星』を参照されたい）、この感じは七七年夏の二度目の訪米でビスタで再会したときも同様だった。

しかし昨年の総会で来日したときは、堂々たる大指導者の風格をそなえた哲人に変貌していた。宇宙哲学と生命の科学に関する驚嘆すべき広範な知識、他人のカルマや過去世を読み取る驚異的な超能力、信じられぬほどの純粋さと人間的な温かさ――。

これがあのホワイティング氏かと私は何度も首をひねる有様だった。以前から氏の態度は神秘的で瞑想的だったが、滞日中は一段と磨きがかかっていた。こちらが話しかけるまでは自分から活発に発言しようとはせず、いつまでも無言のまますごす傾向が見られたが、これは絶えず内部から湧き起こるテレパシックな印象やフィーリングを観察しているためらしい。

彼から話しかけることもあるが、会話の内容はきわめて高次なもので、世俗的なくだらぬ問題には一切触れぬという態度を持していた。といって取り澄ました聖者ぶった姿勢でもない。それどころか実によく笑い、沈黙中でも双方の視線が合うとすぐに微笑する。私はあまり笑わぬほうだが、相手につられていやでも微笑せざるを得ない。他人に清純な笑いの連鎖反応を起こさせて心温たまる雰囲気をかもし出す人こそ、高度な発達をとげた人と称されるべきだろう。

総会の翌日の午後は二人で都内見物に出かけた。まず皇居へ案内する。前日とは打って変わって快晴となったこの日、お濠端を逍遙すると、創造主の生命が躍動して万物が祝福されているかのように見える。

「太陽は燦然と輝き、空には一点の雲もない」と私が英語でつぶやくと、

「そうだ！」と彼は力強く相づちを打って微笑する。

二重橋前で濠を見ていた彼が叫んだ。

「白鳥だ！」

見ると二羽の純白の鳥が水面に美しい影を映している。ここで彼が説明した。

「アダムスキー氏が語ったところによると、白鳥はむかし金星から宇宙船で地球へ連れてこられた鳥だということです」

道理で美しいはずだ。白鳥以外に金星から地球へ来た動物がいるかと尋ねると知らないと答えた。

七七年秋に来日したステックリング夫妻と同様、ホワイティング氏もあまり感情をあらわさぬ人だから、異国の風物にどこまで興味があるのか見当がつかないが、少なくとも宮殿や城や大寺院とかの権力の象徴に関心がないことは確かである。アダムスキーがヨーロッパで古城や教会などへ決して入らなかったのは、その場所から放射される低劣な波動を感受

したためだというがホワイティング氏も同じような波動を感じるらしい。後日、京都のある寺院に展示してある足利一族の代々の将軍の座像群――歴史的に価値の高いものだが――を見たときは、渋い顔をして一目散に逃げ出してしまった。ひどく低次な波動が充満していて、耐えられないのだと言う。

皇居を見たあとは東京タワーへ連れて行った。東京は観光地としては世界で最もつまらない大都市だと考えている私は、せめて高所から見物させれば面白いだろうと思い、展望台へ登ってみた。一年の内で数えるほどしかないような快晴のため、すごく遠望がきく。これはホワイティング氏にとって全くの幸運だった。

彼はアメリカから持って来た日本のアカイ製のビデオカメラを操作して展望台から撮影していたが、バッテリーがダウンしたので写せないと言って、あきらめてしまった。そしてこのカメラを離日までついに使用しなかった。ギックリ腰になるほどの途方もない重量の大型ケースを私に運搬させることを気にして遠慮したらしい。

二十一日には浅草へ行った。ここは私も九年ぶりなので、仲見世の雑踏の中を楽しく歩いたが、彼の眼にもエキゾティックな光景に映じたらしい。ずらりと並んだ土産物店を珍しそうにのぞき込んでいた。過去世からの関係で仏像に興味があると言い、仏像類を並べた店では熱心に観察するので、高さ三十センチばかりの金色に輝く慈母観音像を買って進呈したら、大喜びした。

この日の夕方、東京駅から新幹線で塙君を加えて三人で京都へ向かった。すでに日は暮れて車窓からは何も見えない。日本の田舎の風景を眺望できないのを気の毒に思ったけれども、日程の都合で如何ともなしがたい。しかし車内では宇宙哲学やアダムスキー問題に関して実に有益な話をしてくれて、三時間の旅はまたたくまに過ぎてしまった。

翌二十二日はタクシーで京都の名所旧跡をまわる。型どおりの有名寺院へ次々と案内して、広隆寺で弥勒菩薩半跏思惟像を見たときは、さすがに強い関心を起こしたらしい。何を見ても何らかの波動を感じるかフィーリングをおこすらしいので、その参観ぶりをはたで観察すると対象から放たれる波動の高低がある程度わかる。そして日本の歴史をほとんど知らぬはずの彼が、対象のもつ性質を態度であらわすのである。足利将軍家の座像群などその好例だ。

二十三日は奈良へ行った。雄大な大仏像に強い感興をおぼえたらしく、長時間見続けたあと、右横の空地へまわってから、このあたりに特別強いフィーリングを感じると言っていた。高校生の修学旅行団のガイド氏が大声で説明しているのを聞きながら、これさいわいとばかり英語に訳して話す。大仏の顔の縦の長さが四・八メートルあると話しても格別驚いたような顔をしない。ある程度の予備知識を仕入れて来たようだ。

昼食に寿司屋へ入った。ホワイティング氏は日本食や中華料理を好む。米本国の肉とジャガイモを主体とするアメリカ料理はヘビーなので、食傷していると言う。当初、そうとは知らず、来日以来やたらと洋食をサービスしていたところ、あるとき日本のテンプラが最高に好きだという話を聞いてからは、食事はすべて和食の料理店に案内していた。それで今度は寿司屋へ連れ込んだのである。しかしマグロの握りを一口食べて気持がわるくなったらしく、あとは一切手をつけなかった。生臭く感じたらしい。これは二年前、メキシコで多量のトウガラシの入ったメキシコ料理に私が辟易したのと同じたぐいだろう。民族の食習慣というものはおかしなものだ。

寿司以外の刺身、テンプラ、煮物などは彼もよく食べる。あるレストランで私がテンプラ定食を食べるのを、彼はあどけない幼児が父親の作法をまねるかのように素直に見習いながら食べていた。なんという美しい光景だろう！　ハシの使い方もハワイの日本料理店で練習したと言い、巧みに用いていた。過去世で東洋にいたということから、大体に日本的な物には親近感を持っているらしい。アルコールにも強く、日本酒も相当にいけるようだが、度を越すような飲み方は決してしない。

ホワイティング氏の食事のマナーは、見事なもので、特にグラスをテーブル上に置くときなどは絶対に音を立てぬようにソッと置く。口の音をさせないことはもちろん、ナイフやフォークなどを置くときも決して音を立てない。それがわざとらしくなくて、まことにあざやかで優雅で、見ていてほれぼれする。

あれほどに深遠な宇宙哲学を実践し、指導するからには、まず日常のマナーの面で高度に洗練された人間になる必要を強く自覚しているのだろう。これは私にもすばらしいレッスンになった。

余談だが、昨年十月、山形支部総会に出席しての帰途、列車の食堂車内で偶然にある高名な評論家と同席した。ところがこの人は、これ以上大きな音は出ぬというほどにペチャペチャと口の音を立てて食事をしていた。有名人なるものの実態に失望することが多いが、活字になった論説とそれを書いた本人の品性とは別物だということを、このときほど痛感したことはない。

さて、午後は法隆寺へ行く。ここを私が訪れるのは二十五、六年ぶりなので、期待に胸をはずませながら境内へ入り、世界最古の木造建築物たる五重の塔や金堂などへ案内して、この大寺院が文化的にいかに貴重な遺産であるかということを説明するのに、ホワティング氏はさっぱり反応を示さない。大昔、ここにショートクという偉大なプリンスがいて、今もなお全国民の崇敬の的になっているのだと話しても感動の色も示さない。

夢殿へ向かう長い歩道を散策しながら彼はキリスト教に限らず仏教も宇宙的な真髄からそれて、ひどくゆがめられてしまい、宗教は偶像崇拝に堕落し、大衆に催眠術をかけて恐怖を植えつける結果になったと力説する。現代の既成宗教には全く無関心のようだ。そういえば私がかねてから渡しておいた京都と奈良の有名

寺院の英文解説書を、読みながら歩くようなことはしない。彼はこの世界のあらゆる物をすべて宇宙的な見地から洞察しており、宇宙の法則という次元に基づいて考えているようである。

法隆寺を出て京都のホテルへ帰るまでの一時間二十分、タクシーの中では互いにほとんど無言のまま暮れゆく窓外をながめていた。しかし、ときたま視線が合うと、彼はにっこり微笑してうなずく。何を感知しているのだろう。

京都からは六時すぎに新幹線で帰京の途についたが、途中、またも生命の科学に関してすばらしい話をしてくれた。

翌日の二十四日は互いに休日にしようとかねてから予定していたのだが、日本の伝統的な音楽のレコードを入手したいというので、午後は新宿の紀伊国屋内のレコード店へ案内した。スタイルブックから抜け出たような見事なイタリア風の服装をした彼は、日本人の若い女性たちから注目の的になるけれども、全く意に介する様子はない。人間というものについて驚くべき知識をもつ彼は、普通人と異なって異性を好奇の対象とみなさないのだ。

琴と尺八の演奏を主体にしたものがよいと言うので、店内であれこれと探しているうちに、彼の音楽に対する関心度が気になって尋ねてみた。すると、あらゆるタイプの音楽を好むと言う。こういう表現をする人は大抵の場合、音感を持たぬズブの素人にきまっているので、それなりのものを選ぼうと思っていたら、彼がつけ加えた。

「サンディエゴの州立大学で管絃楽法、編曲法、指揮法などを学び、大学のホールで交響楽団を指揮して、ベートーベンの交響曲の一番、二番、七番、八番などを演奏したことがあります」

このときほど口をあんぐりとあけて彼の顔を凝視したことはない。なんと、かつてはセミプロのオーケストラ指揮者だったのだ！ それを帰国の前日、店内の狭い通路で立ち話をしているときにポツンと洩らすとは——。しかも少なからぬ交響曲の各楽器のパートは今でも全部頭の中に残っていると言う。ただし大学を卒業したのではなくて、音楽に関する分野の単位を取っただけだということである。

こうした話を彼は決して自分から軽卒にペラペラとしゃべることはしない。大体に話しぶりは慎重そのもので、しかも夜空の星のように知性がきらめき、何かの事柄については、洩らしてもよいという時機が来るまでは沈黙を守るというタイプである。滞日中にスペース・ブラザーズとコンタクトしたかと再三尋ねてみたが、彼は一言も答えなかった。

これがいったい二十八歳の青年なのかと私はしばしば考え込んだ。戦後の田舎で暗中模索の灰色の生活を送り、何かを求めながら、黒メガネをかけて終日海岸で海を見つめてすごした私の二十歳代の頃を思い出す。

だがホワイティング氏は音楽のプロにならなかった。現在はアナウンサーもやめて、建設関係の請負仕事をやっており、日本製の小型トラックに機材を積んで、作業服姿で野外の仕事に向かう。いわば一匹狼である。狭い室内で終日マイクロフォンを相手にしゃべり続けるのは宇宙哲学の促進者の職業として不適当なため、休日が自由にとれる肉体労働を選んだ。あるときはスコップを手にして土方をやり、あるときはハンマーを握って建設作業に従事する。

彼の話によると、宇宙哲学やスペース・プログラムの促進活動に専念しようとすればインデペンデントな（独立した）立場にあることが重要で、企業体に属して束縛されたらだめだと言い、彼自身は他人を救うために当座結婚する意志はないとも言う。また現在の米GAP本部は対社会的というよりもむしろ対個人的な指導を主体に活動を遂行しているということだった。

十一月二十五日、美しい夕焼けのなかを一人の神の子は去った。成田空港で見送ったのは私と塙君とインドネシアから仕事で帰国中の志田氏の三人だけだった。これは多数の会員方から莫大な土産物を贈られた場合に運搬に迷惑することを考慮した結果、会員諸氏に見送り方を呼びかけなかったためである。

わずか九日間の滞日であるが、その間ホワイティング氏は図り知れぬ深遠なレッスンと広大な知識を与えてくれた。五十四年の私の人生で、この人ほどに偉大な人物を見たことはない。まさに第二のアダムスキーと称されるべきだろう。塙君も志田氏も心から感動していた。

空港に早く着いたのと飛行機の離陸が遅れたせいもあって時間があまったので、喫茶店で長時間対座したけれども、大部分は沈黙に終始した。

時間がきて、税関へ降りる階段の上でしばし、ためらったが、ついに私は言った。

「もう行きなさい」

彼は微笑して手を差しのべた。

Good luck！ と私は一言だけ述べて、しっかりと彼の厚い手を握り返した。次々と握手したあと去って行く彼の姿がぼやけて薄らいでゆく——。

「来年夏に会いましょう！」と叫ぶと、彼は振り返って OK！ と答えた。

空港を出る前に彼が与えてくれた、すばらしい言葉を最後に記したい。

Faith

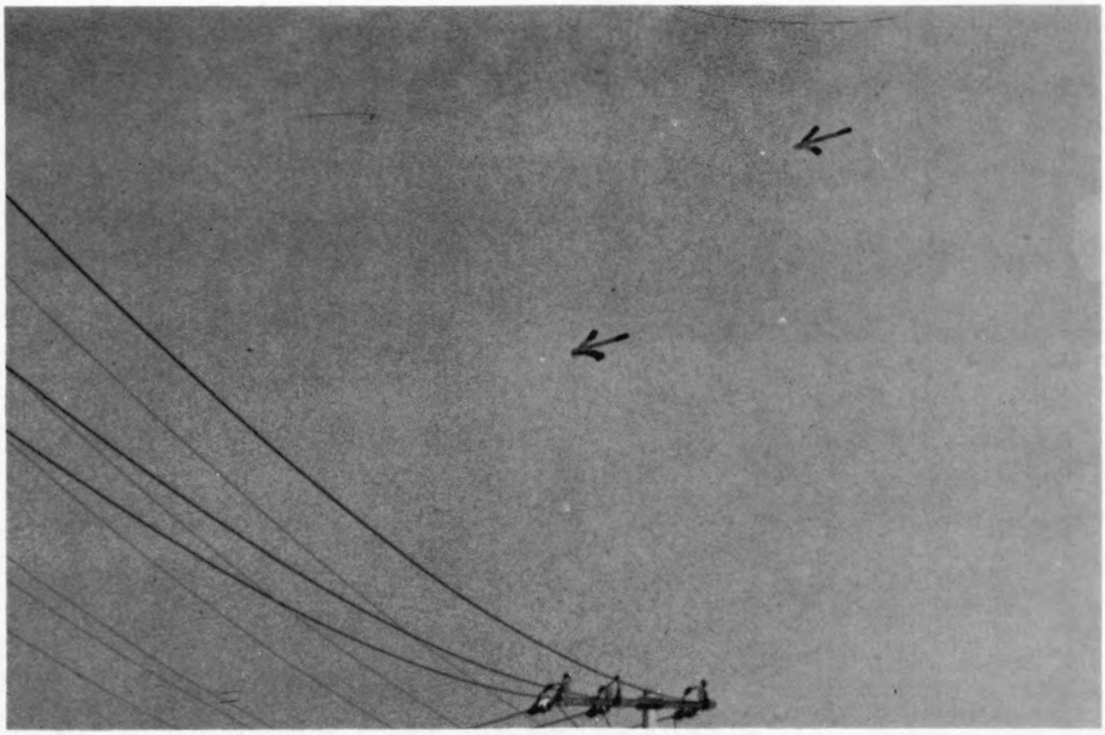
Faith sees the invisible,
Believes the incredible,
And receives the impossible.

信　念

信念（のある人）は見えない物を見、信じがたい物を信じ、不可能な物事を可能にする。

この短くも燦然たる英詩は、おそらく別な世界から来た人が彼に与えたものではないかと思う。

陽光きらめく南カリフォルニアで、今もホワイティング氏はただ独り、大地と取り組んでスコップをふるっていることだろう。



●ヤクルトホール上空に出現した円盤。矢印の個所に白い光体が２機写っている。
（篠　芳史氏（神奈川県）撮影。アサヒペンタックスＳＶ／スーパータクマー105ｍｍ）

●1978年度日本GAP総会会場上空に円盤が飛来！

私達４名（篠　芳史，斉藤泰文，川谷定義，藤井　洋）は昭和53年11月19日，都内新橋のヤクルトホールで開催された日本ＧＡＰ総会に出席し，ＰＭ12時40分に会場付近で食事を済ませ，篠氏の提案で円盤が来ているかも知れないから，見に行こうではないかと４名で“汐留貨物駅構内”に出かけて行きました。

私と川谷氏は世間話を10分間位していた時，斉藤氏がヤクルトホールの方向に双眼鏡（ニコン７×50ＣＦ）で何かを発見したらしく，「あれはいったい何だ？」と私達へ問いかけて来た。私はその方向を見ながら，瞬間に「飛行機じゃないか？」と叫んでいた。

しかし篠氏は「円盤だ！」と言いだした。私は双眼鏡を借りて，その物体をながめてみた時，それは円盤であるという気持になった。その物体は翼が無く，形は楕円体で，太陽の光をあびてキラキラと銀色に輝いていた（非常に綺麗であった）。下側に影も出来ていた。その物体はフワフワと上下運動をしながら前後左右に動いていた。見かけ上の大きさは２～３㎝位に見えた。

円盤は３機飛んでいた。私は思わず手を振ってみた。斉藤氏に「テレパシーを送ってみたら」と叫んでいた。その内の１機が私達の方向に向かってだんだんと飛んで来ていた。私達４名はかなりの興奮をしていた。篠氏は写真機で写真を６～７枚撮っていた。私達４名は15分間にわたって円盤を見つづけたのであります。私達に向かって円盤が近づいて来ていたのであるが，ＰＭ１時15分から午後の部が始まるので，しかたなくその場を離れて会場（ヤクルトホール）に向かって行きました。私は最後まで見たかったのですが，円盤を見るのが目的ではないので，あきらめました。

●円盤目撃者４名

篠　芳史	神奈川県秦野市	藤井　洋	東京都文京区
斉藤泰文	東京都調布市	川谷定義	神奈川県川崎市

●円盤目撃時間
ＰＭ12時55分～ＰＭ１時10分

●報告者　藤井　洋

■総会当日の不思議な事件

この日，ホワイティング氏が講演中，奇妙な出来事が発生した。10時半から11時までの間のある時刻に，ステージに向かって右側半分の席についた10数名の人々のテープレコーダーや撮影機が一斉に停止したのである。浜村達郎君（千葉県船橋市・東京月例会司会者）の優秀なテープレコーダーのごときは内部でテープがグシャグシャになり，録音不可能になったし，８㎜カメラで撮影していた間嶋泰行氏（岐阜市）のカメラは突然モーターが停止して撮影不能におちいった。その他にも原因不明の故障が続出したことがあとで判明した。上空から円盤が特殊な放射線を放ったためではないかというのが大方の意見である。

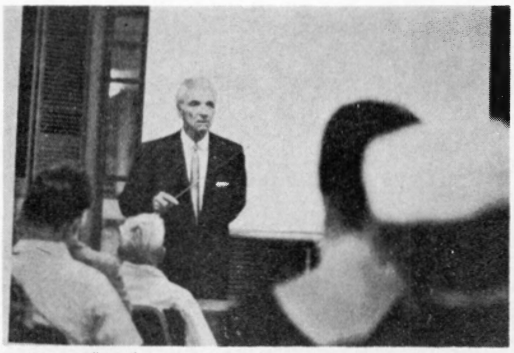
――編者――

ジョージ・アダムスキーの思い出

〈その1〉

ベルギーGAP代表　キース・フリットクロフト

最初に述べておきたいのは、私がジョージ・アダムスキーの存在を初めて知ったのは一九五二年にカリフォルニアの砂漠で彼がオーソンとコンタクトした件について記した『空飛ぶ円盤は着陸した』と題する最初の書物に触れた機会にさかのぼる。彼の主張は私にとって全くファンタスティックなものとは思えず、その物語にはたしかに真実らしさがあった。この書の一部分は『オーストラレイジアン・ポスト』と題するオーストラリアの雑誌に掲載されたので、母国オーストラリアにおける反響は大体に良好だった。



●米国で講演中のアダムスキー

一九五四年後に『宇宙船の内部』が出たとき、私はすぐに入手したが、宇宙空間を旅したというアダムスキー氏の話は真実らしく思われた。地球の初期のロケットが地球の外へ少し飛び出た頃に、だれかが大気圏外へ連れ出されて真相を示されたとしても不思議ではない。後に判明したように、この書に述べられた知識情報は、その時代にロケットの探査実験からアメリカの科学者によって創られた〝モデル大気〟に大いに応用されたのである。

結局私は、オーストラリアの彼の最初のコーワーカー（協力連絡者）の助手になった後、アダムスキーに手紙を書いたところ、数通の丁重な返事をもらった。たまたま私はクイーンズランド円盤研究会にも所属して（現在この会はクイーンズランドUFO研究会と称している）おり、そこの委員の一人だった。

一九五八年に私たち委員会は、UFO界の有名人をクイーンズランドへ招待して講演をやってもらおうということになり、その結果、アダムスキー氏が選ばれた。招待費用を分担する必要があったので、他のUFO研究団体等へ呼びかけて援助方を要請したところ、結局、その旅行はアダムスキー氏にとって世界旅行になってしまった。私たちの団体の書記であったゴードン・ジャミーソン氏は、世界中の各種UFOグループと文通して、何カ月もの間手紙類の処理で多忙だった。したがって、一九五九年の世界旅行をアダムスキー氏は金儲けのために自分で企画したのだといわれているが、実際には彼は招待されたのであって、もとのアイデアはクイーンズランド円盤研究会が出したものである。大体に氏の旅行費用は捻出されたが、氏が金を受け取ったにしても、タバコ銭があれば充分だったろう。（訳注＝アダムスキーは現金を持つことを嫌い、支払いはすべて側近にまかせていた。また一九五九年の世界旅行は、当時すでにア氏のコーワーカーだった編者のもとにもオーストラリアから日本までの旅費を負担しないかと他国から要請があったが、まだGAPを組織していない頃のことなので涙をのんで断った）

極度に敏感なアダムスキー

この旅行の詳細な記事はアダムスキー氏の三番目の書物『さらば円盤』（訳注＝日本語版は『空飛ぶ円盤の真相』）に出ているので、ここで述べる必要はないが、クイーンズランドのブリスベーンであった出来事のうち未公開のものは他国のGAPメンバーにも興味深いだろう。

三月末の午後、ブリスベーン空港にアダムスキー氏が到着したとき、出迎えた人々は報われた。ゴードン・ジャミーソンの若い娘が玩具のコアラ（訳注＝オーストラリア産のクマの一種）をアダムスキー氏に贈ったが、この光景は地方新聞に掲載されたすばらしい写真の中に写っている。アダムスキー氏がオーストラリアに到着したとき、すでにわがグループの広報係幹部ゴードン・ジャミーソンとロイ・ラッセルはシドニーへ行っていたが、二人とも私たちがアダムスキー氏を講師に選んだことを非常に喜んで帰って来た。そして反応の早い氏の知性とすばらしい知識に感銘を受けた。

出迎えた私たちを素早く氏が見回したときの私の印象は、茶色の眼に異常な温かさと、すごく敏感な知性をたたえているということだった。これはこの人の特性の一つである。氏は極度に鋭敏で反応が敏速であり、UFO問題ばかりか科学界の業績やスペース・プログラムについても信じられぬほどの知識を持っているようだった。自分が述べる事実に関しては自信に満ちていたが、この自信はある深い基盤に根ざしているかに思われた。氏の背後に或る強力な支持力があるのだと人は感じないわけにゆかなかった。もう一つの特性は高度な忍耐力と丁寧さでこのいずれも魅惑的で感動的だった。氏の性格は全く独特かつ印象的であった。

高度な忍耐力と冷静さ

忍耐力といえば、四月二日の夕方の出来事を強く思い出す。ブリスベーン市公会堂の円形ホールのステージに氏が現われたとき、少なくとも二千名が座ったり、外側通路に立ったりしており、満員で数百名が入場できなかった。地元大学の学生たちがアダムスキーの話は大きな

冗談なのだときめつけていたが、幸いにも彼らのアダムスキー誘拐計画に関する情報が入ったため、ホール内には警官がいた。それにもかかわらず多数の学生が顔を緑色に塗り、ベッドシーツを身にまとって伝統的な小人宇宙人の姿をしていた。そして彼らのふざけた妨害行為は終始続いたが、アダムスキー氏は冷静な態度を保ち続けたので、その後はUFOの実在説がその大学で話題となって残った。

反対派からも敬愛された

氏が講演中に語った問題の一つに次のようなものがある。それより数カ月前にNASAの公表として、ある人工衛星の軌道の乱れは別な惑星からの干渉によって発生したと新聞が発表した。そこでアダムスキー氏が指摘して、他の惑星群は遠すぎてこれは不可能であり、実際には近隣の惑星から来た宇宙船（複数）が近接調査をするために近寄りすぎて、偶然に人工衛生の軌道を変えたのだと言う。

わが招待客は講演中に自信をもって述べたので、氏は旅行中にアメリカの外交スタッフと接触を続けることを要求された。私たちはこの事をたしかに事実として認めるが、しかしある政府機関は氏を援助していたし、強力に抵抗する機関もあった。

幸いにも氏は事前にすぐれたアドバイスを与えられていたので、どこの国でも講演の前にまず仕事の許可を取らねばならぬことを知っていた。それで氏を別な方法で納得させようとしても、頑としてこの規則に執着した。トラブルがなくてもそうしようとした。だが実際には氏がどこへ行っても、ひそかにトラブルを発生させようとして事前にだれかが待機していた。しかし奇妙なことに最初は彼に対抗した人々も、アダムスキー氏が去って行くまで一緒にいることがしばしばあった。たぶん彼にとって最も楽であった国はニュージーランドだろう。そこでは政府が実際に彼を援助した。おそらく最悪の国はスイスで、チューリッヒでは彼の映画の上映中にスクリーンに強力な光線が投射されたが、居合わせた警官は何もしなかった。

アダムスキー氏が数週間滞在したブリスベーンで私たちが気付いたのは、心霊のような神秘主義を否定する彼の立場に同調しない人ですら、彼が最も好感のもてる性格を持っていることを認めたという事実である。私たちが彼にむかっていやいやながら別れを告げたとき、彼は最高にすばらしい印象を残した。

悪質なジャーナリズム

新興国では成功したにもかかわらず、アダムスキー氏はヨーロッパで強力な反対派に出会うことになった。その後彼の問題を取り上げた多くの悪質な新聞は、かなりな力を持つある大きなグループの反応のせいでもある。オランダのハーグにいたとき、アダムスキー氏はユリアナ女王に拝謁したが、これにはベルンハルト王子ばかりでなく多くの学者や教授も同席した。会見が予定の一時間から二時間に延長されたことはほとんど知られていない。

しかしカトリック新聞はアダムスキー氏の訪問を非常に悪く解釈し、彼とユリアナ女王に反発する運動を始めた。パリの『パリ・マッチ』誌などは完全なでっちあげインタビュー記事を掲載した。これは不幸なスタートで、こうしたインチキが他国の新聞でも繰り返されたし、イタリアの新聞でも試みられた。それにもかかわらず、オランダ王家への訪問は世界中の講演と同様に、全く王室からの依頼によるものであり、アダムスキーが懇願したものではない。

彼はまたイギリスのフィリップ王子との会見の招待も受けたが、これは結局中止された。おそらく当時広く流れていた悪評のためだろう。しかしアダムスキー氏は世界中の重要な地位にある多くの人とひそかに会見している。彼はまた航空技師のレナード・G・クランプにも会った。クランプはUFO報告類を徹底的に研究して、後に著書『宇宙・引力・空飛ぶ円盤』と『はめ絵の一片』でアダムスキーを支持したのである。彼はジョージ・アダムスキーが実際にUFOに乗ったと確信している。

人間は一種のラジオ受信機

ブリスベーンの話に返ることにしよう。アダムスキー氏が私たちと共に滞在した二週間、多くの機会に私は氏と会うことができた。

ある夕方、彼は人間はラジオ受信機のようなものだと言った。結局そのようにしてメンタル・テレパシーが作用するのだという解答を得た。後にソ連の『ポポフ・グループ』が発見した原理である。つまり人間の脳はラジオの送受信の役目をし、二人の人間の想念伝達は、両方の波長が合うときに発生するというのである。これはアダムスキー氏が教えた事柄の証明としてのただの一例にすぎない。

一九六六年に私はヨーロッパへ行き、ベルギーのコーワーカーだったメイ・モルレと会ったが、これが後に私の妻になった。現在、私たち夫妻は『ベルギーUFOインフォメーションGAP』というグループを運営している（訳注＝我々はこれをベルギーGAPと称している）。

私がアダムスキー氏から教えられた自然の法則を学び続けるにつれて、ますます彼の巨大な知識と生命の体験を知ることが可能となる。同時に彼が大衆に示した簡潔さと明快さもわかるだろう。

〈その2〉

メイ・フリットクロフト

一九六一年末に私はベルギーにおけるジョージ・アダムスキーのコーワーカーになった。この年すでに五月にはベルギーUFOインフォメーションの機関誌が創刊されたが、その頃は各国コーワーカー間に密接な協力が行なわれており、非常な関心を持っていた時期だった。

一九六三年に、デンマークのハンス・ベテルセン少佐がフレデリカで行なわれたあるUFOの会合にアダムスキー氏を

招待した。彼はデンマークとフィンランド両政府の招待客になることになっていた。ところがこの招待が拡張して、ヨーロッパの二国、ベルギーとスイスへの講演旅行にも発展したのである。

（訳注＝このときすでにGAP活動を開始していた編者は、アダムスキーの第二次ヨーロッパ旅行の途中、日本にも招待することを企画し、都内で開かれた小集会で提案したが、全く問題にされなかった）。

この旅行における私の役割は当時の十日間において忘れがたい体験となった。彼がベルギーとバーゼル、最後にローマへ行った十日間である。計画どおりにフインランドへは行かないで、アダムスキー氏は激しい逆宣伝の警告を受けて、五月十五日にベルギーのアントワープへ予定よりも早く到着した。彼はひどい風邪をひいて病んでいた。これが彼の肉体の弱点であり、このため二年後に肺炎となり、心臓をやられて逝去したのである。

とにかく私たちはアントワープのセンチュリーホテルへ彼を宿泊させるために急いで手配をした。最初に会見したときに受けた強烈な印象が今も記憶に残っている。アダムスキー氏は年齢よりも若く見え、大変な敏感さを身につけていた。

宇宙人が快復を援助した

彼が到着した翌日、彼をホテルから連れ出そうと電話をかけたけれども、ひどく体をこわして終日自室で寝る以外には何もできないことがわかった。その間、私たちは付近の喫茶店の中から見張っていた。

しかし翌朝、幸いにも彼はかなり快復して私の家へ来てグループの人々に話ができるほどになった。これは金曜日のことで、翌日の土曜日にオランダのコーワーカーたちが長時間の会見を求めてやって来た。このときアダムスキー氏は、一宇宙人によって体の快復を援助されたのだと私に打ち明けた。

同じ日にレストランにいたとき、アダムスキー氏は、居合わせた一人の男に私たちの注意を向けさせて、あの人は宇宙人なのだと説明した。それから私が数年後にデンマークへ行ったとき、ア氏がティボリ公園を訪れたあいだにデンマークのグループのあとをついて行った男が、同じ男であることを知った。

関心のある人々とのこうした集まりはすべて深夜まで続いたが、私たちはしばしば疲れたのにアダムスキー氏は生き生きとしていた。それにもかかわらず月曜日に私たちは休息を求めて海岸へ観光ツアーに出かけた。

水曜日に行なわれた青年たちとの会見は大成功だった。最初にアダムスキーに反対していた人々が、短時間後に彼の味方になり、彼の言葉に熱烈な関心を持つようになったのである。

すばらしいテレパシー能力と忍耐力

アダムスキー氏は私たちの秘書だったスージー・ピーターズ夫人と私に、彼のテレパシー能力の非常に明確な実例を示してくれた。二人で客人用のデザートの準備を台所でしていたとき、どうしてもアダムスキー氏に聞いてみたくてしようのないある問題を論じ合っていた。二人が台所から出て行くと、アダムスキーは私たちを見て微笑し、私たちから一言も聞いたわけでもないのに、こちらの疑問に対する解答を与えたのである！

アダムスキー氏が示した別な特徴は彼の信じがたいほどの忍耐力と、無数の質問に答える能力である。彼がアントワープに滞在中、オーストリアのコーワーカー、ドラ・バウエルとドイツのエリカ・クーレカンプがやって来た。

サン・ピエトロ寺院へ入る

五月二十四日、金曜日の朝、アダムスキー氏と私はスイスのバーゼル行きの急行列車で出発した。そこではルウ・チンスタークがコーワーカーをやっていたのである。彼はクラフトホテルへ滞在して、そこにいたあいだ沢山の会合に出席した。

五月三十日の火曜日に、アダムスキー氏はルウと私につき添われて、ローマへ向かって飛行機で出発した。そして翌朝彼はヨハネ二十三世と会見したと私たちに語ったのである。

ホテルでは支配人がすごく親切で、ルウと私に花束をくれた。翌朝私たちはアダムスキー氏と一緒にサン・ピエトロ寺院へ行った。十一時の会見を行なうためである。その時刻に私たちはバチカン宮殿の左手側にいたが、建物から少し離れた位置で待っていたとき、ドアーが開いてアダムスキー氏が中へ案内された。

彼は十二時半頃に出て来るからと言っていた。そしてその時刻を少しすぎたときにルウと私の所へ帰って来た。

最初の印象に従えばよかった

私たちは一緒にすてきな食事をとった。アダムスキー氏が語るところによると、法王は彼を祝福し、新聞では重病だと報道しているけれども、法王の両頬はバラ色で、元気そうに見えたという。しかし夕方には法王が昏睡状態におちいったという不幸なニュースを聞いた。

昼食後、ルウ・チンスタークと私は休息するために二階へ上がった。私自身はアダムスキー氏と一緒にいたいという印象が起こったけれども、彼を一人だけにしておいたのである。

二人が階下へ降りたとき、彼は私に言った。

「あんたは最初の印象に従えばよかったんだ。バチカンから高官がやって来て、私と話して行ったよ」

話は変わって三年後の一九六六年に、イギリスのコーワーカー、ロン・キャズウェル氏が、私たちが泊まったローマのアルジャホテルへ手紙を出して、バチカン宮殿から男が（アダムスキーのホテルへ）訪ねて来た件に関してマネージャーから情報を伝えるように要請した。

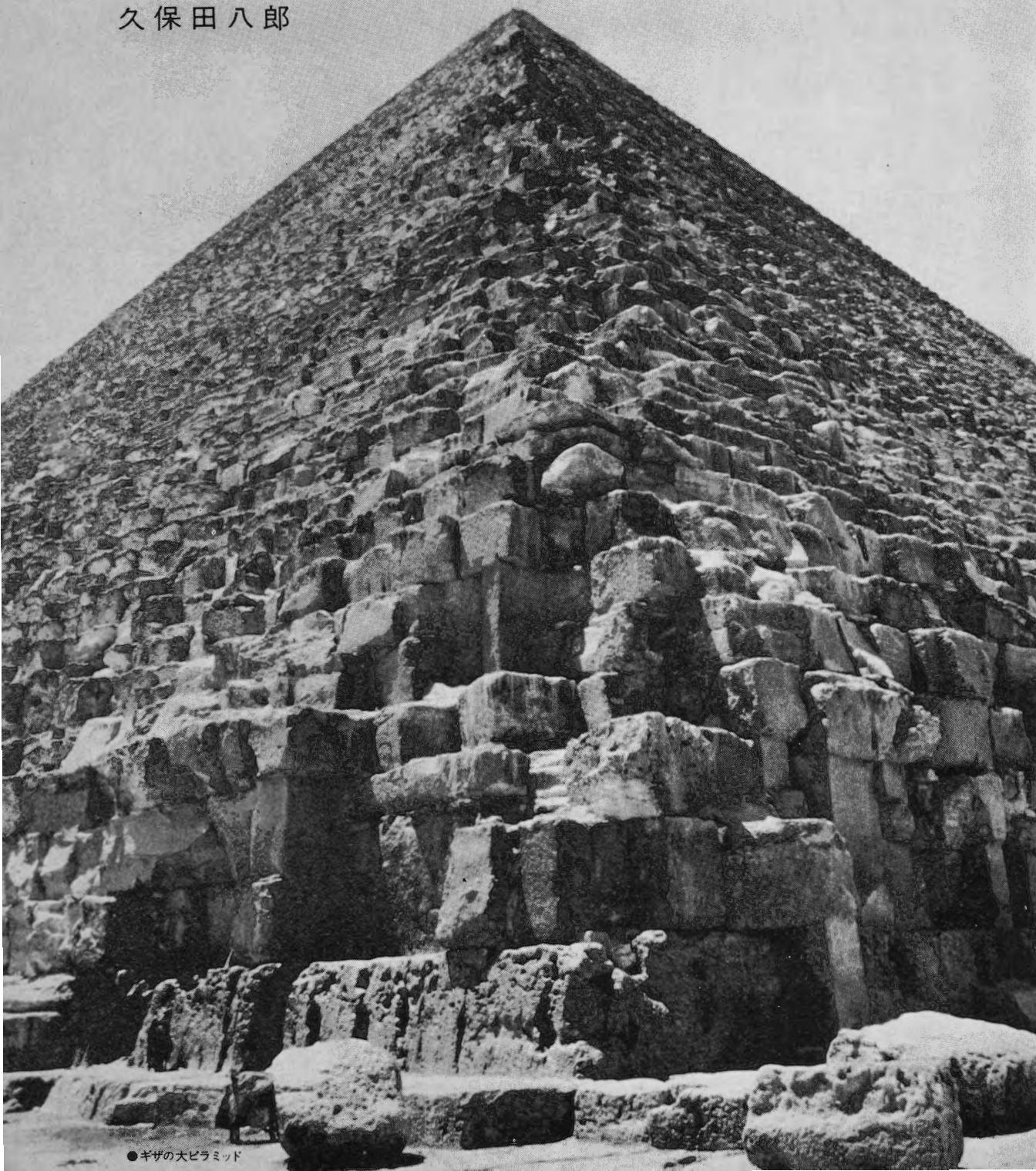
（39頁に続く）

●ヨーロッパ・エジプト紀行

幻影と巨石の国へ②

UFOが2度出現して大騒ぎ！

久保田八郎



●ギザの大ピラミッド

私は実際にコンタクトしたことはありませんが、アダムスキーと一緒にいたときに何回か目撃しています。

たとえば、あるときダンスパーティーにアダムスキーやオランダGAPのメンバーと一緒に行って、テーブルにすわって見ていました。

すると向こうのほうに一人の眼鏡をかけた男が本を持って、こちらのほうをずっと見ておりました。そのときのオランダのメンバーたちの質問は良くなくて、アダムスキーも飽きたような感じでしたが、ときどき男の人のほうも見ています。私はそのとき気づきませんでしたが、あとで考えてみますと、アダムスキーとその男はテレパシーで会話を交わしていたのだと思います。

あとでアダムスキーは『あんたがたは気づかなかったのか？』と言いました。

また、こんな事もありました。一九六三年にヨーロッパのティボリでアダムスキーと数名のメンバーが一緒にいました。そのとき一人の宇宙人があとをついて来たそうですが、それはレストランにいた男と同一人物なんです。顔かたちや服装がそっくり同じでした」

私は質問した。

「いつと、いつとが同じだったんですか」

「一九六三年にティボリにアダムスキーが旅行に出かけたときです」

「ティボリとはどこですか？」

「コペンハーゲンの公園です。大きな公園ですが、そこでアダムスキーと人々が一緒に散歩していたときに、うしろから宇宙人がついて来たんですが、その人とダンスパーティーで見た男の人とが一致していたんです」

「そのダンスパーティーはいつのことですか？」

「ティボリが四月のことでベルギーでのダンスパーティーは五月です。私はティボリにはいなくて、レストランのダンスパーティーにいただけです。ティボリに宇宙人がいたというのは他の人々が確認したのですが、あとでコペンハーゲンに行ったとき、ハンス・ペテルセンと話の花が咲いているうちに、彼らがティボリで見た宇宙人と私がパーティーで見た男とは一致していたことがわかったんです。

スペース・ピープルの特徴

更にもうひとつの体験としては、一九六三年の十月の初め頃、私はアダムスキーに手紙を出さねばいけないと思ってポストへ行ったんです。手紙を手に持っていたら、一人の男がうしろから近づいて『あなたはジョージ・アダムスキーを知っていますか？』と聞くので、『知っています。アメリカで有名な人です』と答えたら、いろいろ話がはずんで、相手が『あなたはアメリカへ行きたいんでしょう？』と言います。私は一九六二年にアメリカへ行きましたし、六三年にも行きたくて仕様がなかったんですが、それを相手はすでに知っていたわけです。すると相手は口を大きく広げて微笑して、続いてベルギーGAPの事などをいろいろ話し合いましたが、ポストの所へ行って別れるときに、急に相手の態度がパット変わったんです。すごくまじめな顔になって、『あなたは何のためにそんな活動をやっているのですか？』と聞くんです。

あとで気づいたのですが、スペース・ブラザーズはよく微笑するけれども、あとで急にまじめな顔になり、その変化が大きいということをアダムスキーの文献で読んだことがありますので、私の体験の場合も、やはりそのとおりだったのではないかと思ったんです。

あとで考えますと、私が相手をブラザーだと気づかないなんてバカだったのではないかと思い、その後一時間ばかり付近を探しましたがついに見当たりませんでした。

それで家に帰ってからその出来事を手紙に書いてアダムスキー宛に出しましたら、『宇宙人だったのだ』という返事が来ました」

「その場所はどこですか？」

「ベルギーのデスという町です。そこの郵便局へ行ったときのことです」

「それは、いつの事ですか？」

「一九六三年の十月初旬です」

ここで端にすわっていた助手の女性が発言した。自分にも特殊な体験があるのだと言う。ぜひ聞かせて下さいと頼むと男のような低い大きな声で話し始めた。

「これは毎年十一月に行なう事です。アポロ十四号を打ち上げる前です。あるとき六人のメンバーと一緒にレストランへ行きますと、窓ぎわの所に二人の男が立っていました。私はテレパシーみたいなものを感じて、ときどき見つめあっていたんですが、連れがいるので、その方々と話し合っていました。すると急に二人の男が『見なさい、見なさい』と書き記したメニューを私のテーブルに投げてよこしたんです。それを見て私がうなずくと、男たちはにっこり微笑して去って行きました。

私はそのメニューをポケットにしまい込んで家に持って帰りました。なぜ『見なさい、見なさい』と書いたのかわからなかったんですが、後にアポロ十四号が月面に着陸したときのテレビ画面を写真に撮ったら、円盤が写っているんです。撮影時には全然気づかなかったんですけど——」

彼女が差し出した写真を見ると、なるほど、たしかに月面のアポロ十四号着陸船の近くにアダムスキー型円盤がはっきり写っている。

「『見なさい』という意味は、このことだったんですわ」

メイが口を出す。

「私たちはブラザーズらしい同一人物を何度か見かけるんですが、どうしても顔が思い出せないんです。顔の輪郭がどうしても記憶に残りません。これは私ばかりではなく他のメンバーたちにも共通した体験です。

ブラザーズは常に微笑する

あるとき私が息子と一緒に道を歩いていたとき、ある男の人が来て、にこにこ

●キャルウォッツ嬢が撮影したアポロ14号着陸のテレビ映画。右上に円盤が見える。

笑いながら話しかけてきました。しかしその人の顔も思い出せないんです。共通点は、ブラザーズらしい人は、常に微笑しているということなんです」

すると助手の女性が語った。

「自分のほうからブラザーズに会いたいという想念を強めると、かえって会えません。ですから、私たちがブラザーズを見かけるのは不意に起こるんです。

たとえば私があるとき銀行に行ったら、大きな背の高い男の人が立っていました。そして微笑しているんです。それで私がブラザーではないかと後ろを見ようとしましたら、壁にはさまれたような感じがして体が動きません。まもなくして落ち着いたので、あらためて振り返って見ましたら、もうその人の姿はないんです。それで、ああ、あの人はスペース・ブラザーだったのだと確信して、このことをステックリング夫妻に話しましたら、間違いないと答えてくれました。したがって、自分がブラザーズを見たいという想念を起こしたときには、そのような結果が発生しないと言えます。

アダムスキーもステックリング夫妻も言っていましたが、自分が興味を起こした態度でいるとだめなんです」

私は尋ねた。

「興味を起こした態度でいると、なぜだめなのですか?」

「つまり興味や関心の想念を強くすると壁ができてしまうんです」

要するに受容的な無我の心境になれという意味らしい。これは呆然となることではなくて、万物一体感からくるマインドの静まった状態をいうのだろう。そうすればブラザーズも接触しやすくなるのだ。

私は次の質問に移った。

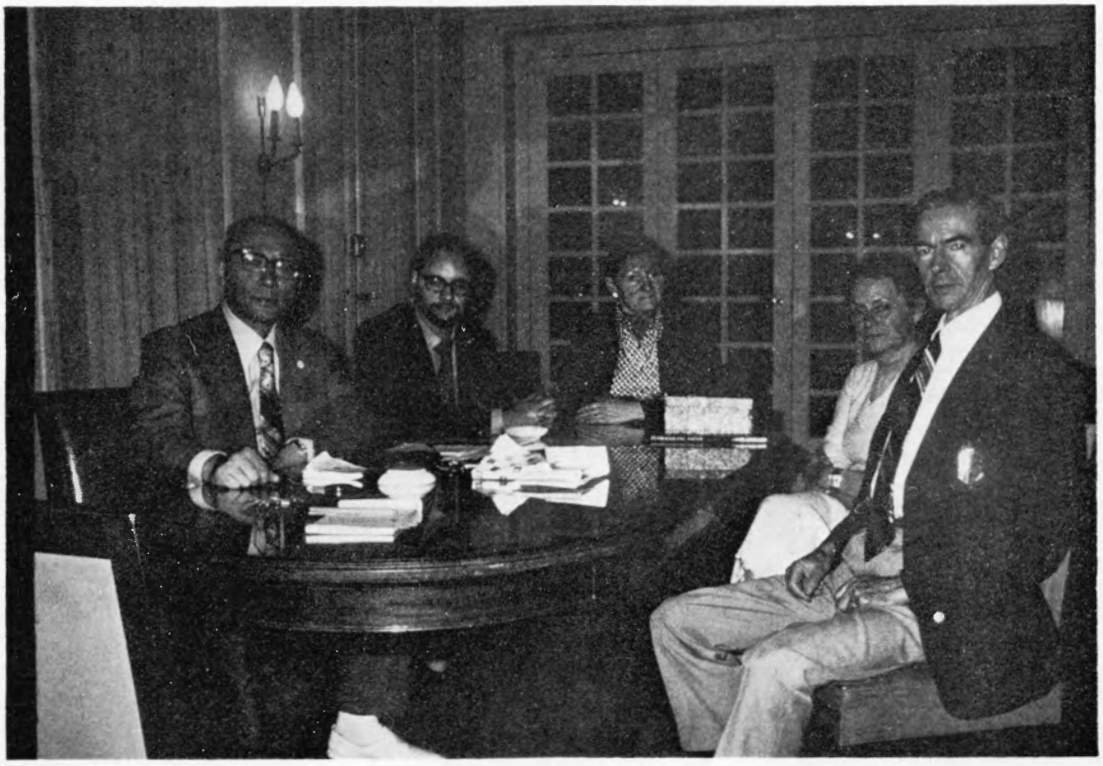
「現在、ベルギーGAPの活動状態はどうですか?」

メイが早口で答える。

「フランス語圏内で、この活動を行なっているのは私たちだけです。機関誌を出し始めてから十七年になります。現在、第49号を出しています。会員は約五百名です。フラマン語の機関誌も一年前から発行しています。問題はベルギーではフランス語とフラマン語と二カ国語が用いられているという点で、そのために『生命の科学』を研究する場合は、フランス語と英語とフラマン語の三カ国語が必要になります。したがって言葉の障壁が大きく存在するんです。

また、フランスやベルギーにはアダムスキー問題に対する反対派がいて、強く

●パリのホテル・ノルマンディーにて左より久保田，フィリップ，キャルウォッツ，フリットクロフト夫妻。



抵抗してきますので、私たちの活動はとても大変なんです」

いずこも同じだ。この活動は並大抵では、やれないことなのだ。

フリットクロフト氏は終始だまって一同の会話を聞いている。何かを話したいらしいが、英語でしゃべるのを遠慮しているようだ。額に少しシワを寄せて、一見憂うつそうな顔をしているけれども、まじめな人物のように見える。

しかし彼も口を開いた。一九五九年と六三年にアダムスキーがオーストラリアへ来たときの状況をここで英語で話そうか、それとも文章にしてあとから送ろうか、どちらがよいかと聞くので、記事にしてあとからなるべく早く送ってもらいたい、そうすれば私の機関誌に載せるから、と答えたら、彼は快諾した。

また、来年（一九七九年）の秋に日本GAPの総会に、あなた方ご夫妻を日本へ招待したいがどうかと打診したところ、二人とも大喜びし、ぜひ行きたい、ちょうど来年の十一月にはオーストラリアへ行くことになっているので。その途中日本へ立ち寄ると都合がよいと言う。フリットクロフト氏のお母さんが八十七歳でクィーンズランドのブリスベーンに健在だが、来年は久方ぶりに会いに行く計画だと説明する。

絵ハガキをこれからステックリング氏に送るので、その中に今日会った旨を一言書き添えてくれと言うので、私は英文で短く書いた。

かたわらにいる助手の方の名を聞くとアンジェラ・ギャルウォッツといい、もとポーランド人で、現在はベルギーGAPのフラマン語関係の文献作成を受け持っているとのこと。つまり、フリットクロフト氏は英語、夫人はフランス語、ギャルウォッツ嬢はフラマン語というふうに語学別に分担しているのである。

息子のフィリップさんはテープの作成や通訳などを担当しているという。

ここで写真を撮ったり、更に資料を見せてもらったりするうちに、アダムスキーの例の宝石のペンダントの写真を取り出して、これを知っているかと尋ねるので、いつかビスタのGAP本部を訪問した折に、実物を見せてもらい、そのとき胸に当ててみたら熱くなったと答えると夫人はそのとおりだと強調し、二人の宝石専門家が調べた結果、あのような材質の石は世界に例がないことを確証したと話す。

日本GAPのことを尋ねるので、会員は約二千名、機関紙は64号まで出し、あらゆる仕事をほとんど私一人でやっていると述べると、彼らは大いに驚いた。

彼らもア氏の『生命の科学』を重視して、三カ国語でこの研究促進活動をやっているという。なにかの困難やトラブルが発生すると不思議にそれを乗り切ることになり、たしかに何者かに援助されていることを感じるとも語る。

時刻は八時をまわり、時間もなくなったので、互いに丁重に挨拶を交わして別れることにしたが、メイ夫人が喉が乾いたというので、ホテル内のバーへ入り、ここで約三十分間、また雑談し、結局、別れたのは八時四十分頃だった。彼らはこれからまた四百キロの道を四時間でアントワープまで帰らねばならぬのだ。よく訪ねてきてくれたと私は衷心より感謝した。

永遠の都ローマへ

翌十八日。午前中は自由行動で、皆さん方は市内へ買物に出かけたらしい。私はゆっくりと休息し、荷物を整理したあと、昼前に全員バスでホテルを出て、ドゴール空港へ向かった。成田空港は世界最大級のドゴール空港をモデルにしたといわれるが、規模はケタはずれに違う。

この空港を一時に離陸して約二時間後の三時にローマ空港へ着き、ただちに市内観光にはいる。最初はパラチーノの丘次はコロセウムだ。古代に残忍な格闘技が行なわれたこの場所でひどく低劣な波動を感じたアダムスキーは、ここへ決して入らなかったというが、私にはそれほどの超感覚はないので、見るだけ見ようと思い、一同と共に中へ入った。

別段、波動などは感じないけれども、多数の人間がライオンに食い殺された場所だと思うと、やはり気味が悪い。猛獣の咆哮や人間の悲鳴が響いてくるような気がする。ラフカディオ・ハーンの『最後の訣別』で見事に描写されている恐怖の場面を思い出しながら、早々にここを引き揚げて、バチカン宮殿、すなわちサン・ピエトロ寺院へ向かう。

バスを降りると、大広場の彼方に大寺院が逆光となり、黒いシルエットが空に浮かび上がっている。なんという壮大な建築物だろう。カトリック大本山としての貫禄は充分である。

イタリア・バロックの巨匠ベルニーニが十七世紀に設計した楕円形の広場を前進すると、左右には幅十五メートルの円柱廻廊があり、その数は二百八十四本。その円柱のなげしに百四十人の聖人の像が林立し、実に壮観だ。大体、西洋の美術は教会建築が源流をなすので、これを理解しなければ現代美術の作品の観賞は不可能だといわれているのである。

聖ペテロの遺体が葬られたというこの場所に、三二六年、最初のローマ皇帝コンスタンティーノによって小規模なバシリカが建てられたが、十六世紀に法王ジュリオ二世の依頼により改築に着手したのはブラマンテで、以後、設計はラファエロ、ミケランジェロ、ポルタ、フォンターナ、マデルノ、ベルニーニと受け継がれて、一六二六年十一月に完成したのである。一九五〇年には主祭壇の地下に聖ペテロの遺体が存在したことが確認されて、伝説が実証された。

まず高さ四十五メートルの豪壮なファサード（正面部）が眼につく。上部には十字架を手にしたイエスと、ペテロを除くヨハネ以下十一人の使徒の像が並ぶ。中央のバルコニーは何かの行事のときに法王が出て来て、大群集に祝福を与える場所である。

内部の壮麗さはたとえようもない。本堂の中央部はラテン十字型に設計されて最長二百十一メートル、幅二十七メートル、高さ四十六メートルと実に巨大だ。見上げると高い天井や壁などは大小さま

ざまのドーム、彫刻、モザイクなどで充満しており、どれが、だれの作品なのか覚えられたものではないが、最大の見ものは、入口から入ってすぐ右側にあるミケランジェロ二十四歳のときの名作『ピエタ』だろう。十字架から降ろされたイエスをマリアが抱いている大理石像で、六年ほど前に狂信者がマリアの手にしがみついて壊したため、今はガラスで仕切りがしてある。

この大寺院の最奥部には聖ペテロが使用したといわれる木製の椅子がおいてあるはずなので、見たくてしようがなかったが、不可能だった。なぜなら奥の祭壇でミサが始まったからだ。寺院内にいる各国の参観者で人垣ができたかと思うと、白い衣を着た少年僧たちの行列がどこからかしずしずと入って来て、そのあとを青年僧、壮年僧というふうに修道士たちが果てしもなく続いてはゆっくり前進する。奥の方では修道女たちの聖歌隊による聖歌が美しく響きわたる。

なんという荘厳な雰囲気だろう！　ここでは宗教がどうのこうのという理屈は通らない。存在するのは過去の偉大な人々に対する賛美と信頼感のみだ。それでいいのだろう。

「若い女性が涙を流して感動していましたよ」と膳氏がささやく。それもいいだろう。人間には感動の動機と場所が必要なのだ。

現地在住日本人ガイドの吉田さんによると、このミサは法王パウロ六世の死を悼んで、この頃ときどき行なわれるもので、ふだんはめったに見られないのだという。私たちは運がよかったのだ。

もっとミサを見たかったが、時間がないので本堂を出てから、向かって左横の駐車場の方へ行く。このときアダムスキーが入って行ったという横の門のほうを見ると（写真1の白い矢印の個所）、なるほど独特なスタイルのスイス人衛兵が二人立っている。奥のほうをのぞきながらカメラに収めた。

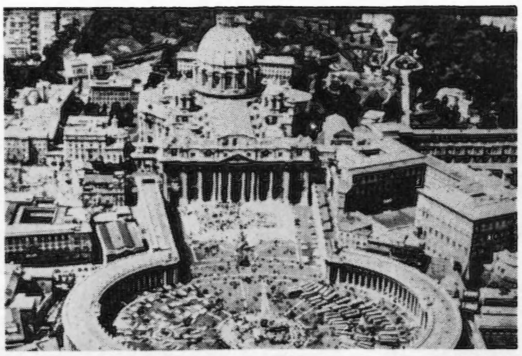
●サン・ピエトロ寺院（1）

次にバスはベネチア広場へ行き、ここでフォロ・ロマーノの遺跡を望見する。これは古代ローマの中心地だったところで、シーザーにゆかりのある場所だ。ここには古代ローマが共和制になる以前から実に十八世紀にわたって上院議員が一堂に会したというレンガ作りのクリア（元老院）の堂々たる建物が残っている。

「うへーっ、これが元老院か！」

驚いて私は見上げた。シェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の舞台になった場所だ。

バスはトレビの泉へ行く。ローマには噴水が多いが、ここの噴水が最も有名である。さだめし広大なものかと思ったが意外に狭い。一七六二年に作られたもので、ナポリ侯爵の豪邸のネプチューン像をうまく利用してバックにしてある。



●サン・ピエトロ寺院（2）（現地資料）

池の周囲は数千名の観光客が取り巻いて、ごった返している。いったいにイタリア人は陽気で明るくてカラッとしている。ローマは世界一泥棒の多い都市だと聞いているので手荷物に充分注意するようにと再三皆さんにアドバイズしたが、そんな気配が感じられないほどに楽しい町だ。この雑踏の中にいると、チャイコフスキーの『イタリア綺想曲』の軽快な旋律が頭の中を流れてくる。いかにもそれにふさわしい雰囲気だ。

次にスペイン階段へ行き、最後はポポロ広場を見学して、夜は全員でレストラン『ミノ』へ入り、ここで本場のスパゲッティーを思いきり食べた。日本のものより少し固目だが、すごくおいしい。ワインの酔いも手伝って、一同、にぎやかに歓談する。

ナポリとポンペイを周遊

次の十九日はバスでナポリとポンペイを周遊する日だ。早朝七時に全員で出発し、ハイウェーを時速百キロで飛ばすのは爽快である。

ナポリは紀元前七世紀頃からギリシアの植民都市として発展したが、前四世紀にはローマに征服された。歴史はかなり古くて、市内には国立博物館、美術館、教会、広場など、見る場所は多いが、私たちにはその余裕がないので、見晴らしのよい高台にバスを停めて、ここから湾を遠望する。「ナポリを見て死ね」といわれるほどに景勝の地となっているが、一望すると、それほどでもない。

丘を降りて海岸へ行き、全員の記念写真を撮影して付近を散策する。防波堤の突き出た一帯をサンタ・ルチアというらしい。歌で有名だが、どうもピンとこな

い。こんな港なら日本にもざらにある。雰囲気が異なるのはたぶん海岸に並ぶ建物のスタイルのせいだろう。

続いてバスに乗った私たちは南東へのハイウェーを二十二キロ進んで、ポンペイに着く。ここの遺跡はあまりにも有名なので、駄文をこねるほどの必要はないが、紀元七九年に背後にそびえるベスビオ火山の大噴火によって埋没したのを堀り出したもので、昔は海に面していたらしい。

ポルタ・マリーナの門から狭い通路を行くと、右手にバシリカ、左手にアポロ神殿があり、続いて中央広場へ出る。更に進むと、あるわあるわ、石造の家屋や壁がぎっしりと立ち並んで実に壮観だ。これほどの広大な遺跡をよくも発堀したものだと感心しながら迷路のような小道を歩きまわる。古代は殷賑をきわめた一種の保養地だったらしい。

圧巻は『娼婦の家』だ。さして大きくない二階建の家の中へ入ると、左手の壁に古代のポルノの壁画が数点並んでいる。内容はそのものずばりで、現代のポルノ絵画と異ならない。いつの時代も人間は不変なのだと妙に感心しながら奥へ入ると、右手に厚い壁で仕切られた四畳半程度の部屋が三つ並んでいる。ただし日本のタタミの四畳半とはちがって、ここにはどの部屋にも大きな石のベッドがおいてある。隣室とを仕切る壁は天井まで届いていないから、隣の声が筒抜けに聞こえたのではないだろうか。

その他、なんとかの家、なんとかの壁画、なになに屋等が無数に残っている。

二時頃、入口付近のレストランで全員昼食をとる。ここでもスパゲッティーが出たが、実にうまい。大体スパゲッティーの発祥地はナポリ近辺なのだ。これはまさに本場中の本場である。しかもレストランのウェイターはユーモラスな男で、日本語を少し心得ていて、「オオモリ、オオモリ」と言いながら、いくらでも持って来る。ここでは食べ放題なのだ。私はワインを二本あけてすっかり気分がよくなった。

折から中年のイタリア人の楽団が入って来て演奏を始める。マンドリン二挺にギター一挺から成り、歌手一人がついておきまりの『サンタ・ルチア』を歌う。

●娼婦の家（左側）を見る一行

●ポンペイの広大な遺跡（現地資料）

円盤が出現！

このレストランを出てローマへバスで帰る途中、私はワインの酔いで眠たくなり、いつの間にか寝込んでしまった。「円盤が出ましたよ！」という田中氏の声で眼を覚ました私は、示指される方向を見た。バスの右手の窓に、たしかに黒い物体がフワフワしているのが視野に入る。

「やーっ、出たーっ！」

大声で叫びながら凝視する。あわててカメラバッグに手を伸ばしたが、まもなく見えなくなった。車内は騒然としている。

ローマ市へ帰ってからホテル付近の小食堂で田中氏や他の4名の方々とで食事をした折、泉博文・和夫氏のご兄弟（奈良県）のうち、兄の博文氏が目撃について次のように語った。

「自分が円盤の最初の発見者で、高速道路の料金所を通過したあたりで直径六、七メートルと思われる黒いドーナツ型の円盤状物体が空中でヒラヒラするのを見ました。中心部は穴があいたように透明でした」

この物体はバスの右側にいた人のほとんどすべてが目撃したし、私も見たからUFOに間違いないと思う。飛行機やその他の確認物体とはまるで異なる奇妙な物だった。タコではないかという説もあったが、ガイドの吉田さんの話によると今どきローマでタコをあげる習慣はないという。

八月二十日、朝、ローマのホテル『ベバリー・ヒルズ』を全員で出て空港に向かう。ここから今日はギリシアへ入るのである。

飛行機の都合により大回りすることになり、途中十一時四十分にいったんスイスのチューリッヒへ寄り、ここでジャンボ機に乗り換えて一時に出発し、五時三十分にアテネ空港へ着陸した。ただちにバスでホテル『スタンレー』へ行く。

コリントとミケーネを見る

さて、翌二十一日はギリシアの代表的な遺跡コリントとミケーネ目指して朝九時にホテルを出る。出発前、ロビーに立っていると、天井のスピーカーからギリシア民謡らしい合唱の歌が響いてくるのが聞こえてきた。しばらく耳を傾けていると、次々に変わるメロディーがすばらしい曲であることに気づいた。陽気で、牧歌的で、いかにもギリシア的な明るい民族音楽だ。幸いにもこれと同じレコードをホテル内の売店で見つけて買ったが、これはよい収穫だった。テオドラキスという現代民謡の作曲家の手になる歌曲集である。

さて、最初の目標はまずコリントである。ガイドはギリシア人のヴルガー夫人で、年の頃は三十歳ぐらいか。アテネ大学で考古学を専攻し、その後、日本へ留学して京都大学で考古学を学んだというだけあって、訛りはあるけれども日本語はなかなか達者である。夫君も考古学徒であるとの由。

例によって高速道をぶっ飛ばす。途中でバスを降りて古代に計画されたという運河を見る。ローマ時代に企てられたこの運河はコリンシアコス湾とサロンコス湾を結ぶもので、失敗したけれども一八九三年にフランスの会社が完成させたものである。

バスの中でヴルガー夫人から個人的に英語で聞いたところによると、日本人は大変親切で強い民族なので、ギリシア人は特に日本人に対して友好的だという。これは単なる外交辞令でもないらしい。ホテルのクラークたちも私たちにはイタリア人に劣らず親切だった。

紺碧の空の下、エーゲ海が美しく広がり、オリーブの畑、白亜の家々が流れてゆく。ハゲ山が多く、緑濃い深山というようなものは見当たらない。

やがて標高五百七十メートルのアクロコリントの山が見えてくる。その山麓に古代のコリントの遺跡があるのだ。近代コリント市は少し手前の右側に位置し、白壁の美しい家が立ち並んでいる。

古代コリントは前六世紀頃に商業の中心地として繁栄したが、その後ローマ軍の侵略により破壊された。西暦四十四年にシーザーが再建したけれども、三世紀頃から衰退して、地震などにより埋没したのである。

北東の人口から入ってレケオン通りを通ると左手に大浴場跡、アポロンの神殿、ピレーネの泉などが眼につき、更に行くと往時の商店街跡へ出る。広場の中央には石の演壇があり、ローマ時代に将軍や政治家がここで街頭演説をやったという。演壇の奥にはギリシア時代の大規模な柱廊がある。

最大の見ものはアポロンの神殿で、古代黄金期の前六世紀に太陽神アポロンを祭って建立された。オリンピアのヘラ神殿に次いで古いものである。ドリア式の柱が七本残っている。

今を去る二千五百年前、この地に十万人もいた金髪碧眼の美しいアーリア系白人が優雅に生活したのだろうが、現代のギリシア人はブルーネット（黒髪・黒眼）が多い。オスマントルコの侵略の影響だろう。全くの雑種になってしまったのだ。ヴルガー夫人によると現代ギリシア語は古代のそれとはまるで違うという。ただし文字だけはギリシア文字を使用している。試みにプラトンのアカデメイアの跡がアテネにあるかと聞いたら、そんなものは全く存在しないと答えた。

博物館へ行くと、横の空地に柱頭の飾りの変遷を示す柱が六個横に一列に並べてあり、左二個がドリア式、三番目がイオニア式、右から二番目がコリント式となっている。

館内へ入ると出土品はローマ時代の物が多く、ギリシアに比べて精巧ではないような印象を受ける。コリント式のツボ類に眼がひかれる。栄光ある古代ギリシアの美術も蛮族たちの蹂躙により低下したのだ。〃上品な人間も下品な人間に支配されるとダメになる〃という例をギリシアの遺跡や歴史でイヤというほど感じさせられたが、このことは後日エジプトを訪れて再度痛感した。こうした点でも遺跡見学は絶大なレッスンになる。

ミケーネの遺跡に感動！

十二時すぎにミケーネの遺跡に着く。ここはドイツ人、ハインリッヒ・シュリーマンの発掘によって一躍脚光を浴びた場所だ。各国人の大群集に混じって坂を登り、ライオンの門をくぐると、右手に一八七六年にシュリーマンが発掘した円形墓地がある。ふちに立ってながめると、彼の体内の鼓動が響いてくるような感動をおぼえて胸が熱くなってくる。

彼は薄幸な環境に育ちながら少年時代からホメーロスの壮大な叙事詩の物語を事実と信じて、無学歴にもかかわらず人生の苦難とたたかいながら独学を続け、商人として成功し、莫大な資金を得た後、トロイとミケーネの大発掘を敢行して、ついに伝説の真実たることを実証した偉人である。正統考古学界からバカにされながらも先史文明を明確にした大考古学者であった。古来、偉大な発明発見者にはアマチュアが多いが、シュリーマンほどのドラマティックな人物はそうざらにいるものではない。

深さ三、四メートル、長円型の長軸が約十五メートルある墓地は何の変哲もない大穴だ。付近は大群集でごった返している。

次にアトレウスの墓に入る。内部は高さ十三メートル、直径十四メートルの大円錐型の石造で、これはアガメムノン王の墓ともいわれているとヴルガー夫人が説明する。

近くにはアガメムノン王の妃であり、娘のエレクトラに殺された間男のナンバーワンたるクリタイムネストラの墓と、その彼氏で、一緒に殺されたアイギストスの墓もあるというが、これは見なかった。

女の子が父親になつきたがる心理を心理学上『エレクトラ・コンプレックス』というが、その語源になった陰惨な一大ドラマの演じられた場所とは思えぬほど荒涼とした地帯である。

遺跡の丘を降りてから一同は一時半に付近のレストラン『ホメーロス』で昼食をとった。出た料理はムサカというギリシアの代表的な食事で、ナスビと羊の肉である。われわれ日本人には美味とはいい難いが、ギリシア人にとっては調理が面倒なために一カ月に一、二度しか食べないご馳走で、日本の寿司に相当するものらしい。

ここで一時間ばかりを食事と休憩についやして、またバスに乗り、アテネ目指して出発した。

バスは海岸沿いの二車線路をぶっ飛ばす。ふたたび沿岸の美しい風景が展開する。白壁の家、オリーブ畑——。全くギリシア的だ。

かなり時間が経過してからバスの運転士がテープでギリシアの陽気な牧歌的な曲を流す。ヴルガー夫人に聞くと、歌っているのは現代ギリシアの有名な女流歌手、ナナ・ムスクリーという人で、伴奏に使われている楽器はマンドリンを大きくしたようなブズキという民族音楽の楽器だと説明する。すばらしいメロディーが窓外の光景にマッチして、快適なること、たとえようもない。

●墳墓Aの前で説明するヴルガー夫人（中央）

日本人を恐れるヨーロッパ人

夕方ホテルへ帰り、ひと休みしたあと二十数名でホテルを出てアテネの繁華街にあるキャバレー『ブランカ』へ行く。キャバレーといっても日本のそれと異なり、ホステスは一切いない。

この『ブランカ』の半分は青天井で、薄汚くて土俗的だ。広い場内には各国の観光客がグループごとに長いテーブルに陣取り、食事をしながら正面ステージの歌や踊りを見るのである。

すでに四人組の男により演奏が始まっており、その中心にいる男がブズキの奏者で、聴いてみると、かなり達者な腕前だ。スピーカーを通して耳をろうするばかりの大音響が響く。ギリシアの民族音楽ばかりでもなく、各国の有名な曲を演奏する。その国のお客さんを喜ばせようという作戦らしい。

私たちの右側のテーブルについている二十名ばかりの白人が騒ぎながら声援を送り、しきりに写真を撮っている。たぶん日本製カメラだろうと思い、いかなるカメラを使用しているか尋ねてみてくれと野島君（高二・大阪）に頼むと、キャノンという返事が返ってきた。どこの国の人間かと聞くとフランス人だという。見かけは実に親日的だ。

しかし彼らは日本人を恐れているのである。このことはパリで春田嬢と話し合ったときに興味深い情報として伝えられたものだ。彼女によると、ヨーロッパにおける日本の経済侵略は大変なもので、フランス人は、いずれ日本人は世界を征服するのではないかと考えて恐怖心をいだいているのだという。

さて、ステージでは民族舞踊が始まった。ギリシアの民族衣装を着た男女がステージいっぱいに踊りまくる。本当の伝統的な踊りなのか、観光客相手のでたらめなものなのかは見当がつかないが、エキゾティックなムードはただよい、観客も熱狂して拍手する。

料理はサラダ、肉、果実、ワインまたはビールで、一人の料金は四百ドラクマ（約二千二百円）である。日本のキャバレーやナイトクラブに比べれば格好だろう。

楽しかったパーティーをすませて一同外へ出ると、深夜だというのに狭い路地

の繁華街は人波で埋まり、容易に歩けないほどの大混雑を呈している。タクシーを待ちながら入口の所に立っていると、二人の若いギリシア人の男がそばへ来て、おまえの眼鏡のレンズは上へはね上がるようだが、それをやってみてくれと、片言英語で話しかけてくる。どこかで見ていたのだろう。そこで、やってみせると手をたたいて喜んでいる。こんな物が珍しいほどにギリシアは文化が遅れているのかもしれない。アテネ市内も決して美麗な町とはいいがたいが、歴史的背景が深いので壮重な感じがする。

深夜十二時半頃にホテルへ帰ったが、この頃から腹の調子がおかしくなり、体調がわるくなってしまった。

パルテノン神殿を見学

翌日の午前中はアテネ市内をバスで見学する。なんといっても最大の目玉はアクロポリスの丘にそびえ立つパルテノン神殿で、これは市の中心部にあるから、どこからでも見える。夜間は美しく照明されるので、前夜はホテルの屋上から望見した。

そこへ行くまでに憲法広場、国会議事堂、オモニア広場などをまわる。憲法広場はシンタグマと呼ばれ、官公庁街に囲まれた市の心臓部で、前六世紀に開設されたアカデメイア、キュノサルゲス、リュケーオンの三つの学園のうち、リュケーオンの隣に前四世紀、アリストテレスの学園の後継者であるテオプラストスがムーサイの神苑を造営した。それが現在の憲法広場である。ただし往時の遺跡は何もなく、わずかに当時の大理石の境界石が広場に立てられているだけだ。

一方、オモニア広場は下町の中心地で雑然とし、不潔で騒がしい場所だ。アテネは金銀細工の特産地で、それを売る貴金属店がこのあたりに密集している。

いよいよアクロポリスの丘を上がる。古代に都市国家であったこの場所は前十六世紀から十二世紀にかけて城塞化され、前六世紀の中頃にはアテナ女神を祭ったアテナ古神殿が完成したけれども、前四八〇年にここを占領したペルシア軍に破壊された。

その後、ペリクレスの指導下に前四三八年、現在のパルテノン神殿の原型ができたが、ローマ支配下に入るとキリスト教会として改修され、更にオスマントルコの領土になると回教寺院に改築されるという不運な変遷をとげている。

一六七八年にベネチア軍が包囲したとき、トルコ軍により火薬庫にされていたパルテノンは大破し、瓦礫の山と化してしまった。それを近代になって復元改修したのが現在見られる神殿である。したがって古代のままではない。

まずブーレの門をくぐって急な階段を登るとテラスがあり、続いて前門の右手前に前四二五年に完成した大理石の優美なニケの神殿がある。これもトルコ人が破壊したものだが、ギリシア独立後に復元された。

前門の中央楼の正面には六本の太いドリア式の巨大な柱が並び、内部にはイオニア式の柱が三本ずつ聖道の左右に並

●パルテノン神殿前にて

ぶ。これをくぐると広い高台に出る。昔は壮麗な大理石の石ダタミだったのだが度重なる戦争と破壊で徹底的に痛めつけられたものらしく、あちこちに石の残ったひどいでこぼこの地面だ。各国人の大群集にまじって、ここにも日本人が沢山来ている。

やがて右手前方に世界三大建築のひとつといわれるパルテノン神殿の壮麗な雄姿が現われてきた。そばへ寄って見上げると実に雄大だ。基段の横が三十メートル、奥行七十メートル、柱の高さは十メートルのドリア式建築で、正面と裏面に各八本の柱が並び、左右側面には十七本ずつの巨大な柱が並んでいる。

台地に立って正面から見るとわかるが各柱は内側に少し傾いている。これは垂直にするとそばで見て安定感がわるいために傾斜させたもので、また各柱を等間隔に立てるとかえって不規則に見えるためにわざと間隔を不規則にし、柱はエンタシス（ふくらみ）になっているので遠くから見るとむしろ垂直に見えるなど、人間の錯覚を巧みに利用して、前五世紀に天才彫刻家フィディアスを総監督として十五年間で完成したという。だが、こんなすごい大建築も蛮人の手にかかってはかなわない。現在は柱が残るのみで、屋根はもちろん他の物はほとんどない。

この大神殿の右手の崖に近い所にエレクシオン神殿だけが形をとどめている。イオニア式の優美な小建築で、南側には六体の女神像が頭で天井を支えた柱廊がある。このうち左から二番目の像はコピーであって、本物は大英博物館にあるという。これは一八〇一年にイギリスのエルジンがパルテノンの彫刻のうち、価値の高いものを片っぱしからはぎ取って本国へ持ち帰ったためである。

午後は古代ギリシア芸術の粋を集めた国立考古学博物館へ見学に行く予定だったが、この日、博物館は二時に閉館だというので不可能になった。残念でしようがない。

したがって自由行動となり、途中でバスを降りて各自バラバラに解散する。私はバッグをさげて、市街の目抜き通りを一人で歩いた。オモニア広場へ行くと、橋本明君（GAP会員・栃木市）が店のそばでパンを立ち食いしている。安いものを食べないと、こづかい銭がもちませんと言う。同君を激励したあと私も汚いい喫茶店へ入り、腹工合が悪いので、熱いギリシア茶を二杯飲んだ。甘くて結構うまい。

この店を出てからホテルへ帰り、カメラだけをさげて付近の道を散策する。ときたまずばらしい被写体に出くわすがボディー一台だけではうまくゆかない。

ついにエジプトを訪問

夕方六時二十分に飛行機でアテネを出発した私たちは、一時間後にカイロの空港へ到着した。今日から最後の訪問地であるエジプトへ入ったのだ。

ホテル『エル・ボルグ』の自室の窓からすぐ前にナイル川が流れ、夜景が美しく展開し、ベランダから見ると眺望絶佳だ。ここは四泊五日の予定なので、ゆっくりと大洗濯をする。

明くれば二十三日、午前九時に全員バスでホテルを出る。すごく暑くて四十度ぐらいはあるらしいが、空気が乾燥しているので日陰に入ると涼しい。

カイロ市内は不潔で、ガラベイヤという長い衣のような服を着たエジプト人の貧民たちが町中に満ち溢れている。

驚異的な国立博物館

午前中はまず市内の国立エジプト博物館へ見学に行く。これはナイル川東岸のヒルトンホテルの近くにあり、古王国時代からグレコ・ローマン期に至るエジプトの古代文明の出土品十万点以上を展示した世界有数の大博物館で、カイロを訪れる人の必見の場所である。

館前広場でバスを降りると、カメラは持ち込めないからバスの中に置くようにという注意に従って、全員手ぶらで中へ入る。

一階の入口左側が古王国時代のコーナーで、カフラ王の堂々たる座像、メンカウラと二人の女神像、書記像、ペピ二世などの像が威容を示している。西側は中王国時代で、黒花崗岩のスフィンクスや石棺などが展示され、北側の新王国時代のトトメス三世像、アクンアトンの部屋などを見る。数十体のミイラを収めたミイラの部屋には不気味な空気が流れている。

最大の見ものは二階のツタンカーメンの部屋だ。有名な黄金のマスク、黄金の棺、厨子などが所狭しとばかりに並べられ、特に王が使用したという黒塗りの大戦車など、ドギモを抜くような副葬品が広大な室内にぎっしりと安置されて、息づまるような思いがする。

館内は写真撮影禁止のはずなのに、どこかで一人の若い白人がペンタックスで堂々と出土品を撮影しており、しかもガラベイヤ姿のエジプト人監視員たちは見て見ぬふりをしていた。この頃になって気付いたのだが、監視員たちに金をつかませれば撮影は黙認されるらしい。

こうした〝でたらめさ〟はエジプトに滞在するにつれて次第にわかってくるが考えようによっては便利な国だ。息づまるような圧力と規制のもとに窮屈な思いをして暮らすよりも、エジプトのだらしないイージーな雰囲気は、一種の解放感を起こさせて、むしろ、さわやかな気分にさせるのである。

大ピラミッドの中へ入る

博物館を出た一行はバスでギザに向かった。旅行の最大の目標である大ピラミッドを見学するのだ。

郊外の田園地帯へ入ると、よれよれのガラベイヤ姿の少年が白いロバに乗って小川のほとりをパカパカと進行する。黒い顔の女たちが頭上に大きな荷物をのせてゆっくり歩く。ヨーロッパからエジプトへ来ると、ここは全く異質の世界で、ひどく原始的だ。いたる所にイスラム文化圏特有の一種異様な光景が展開する。

バスの窓越しに外景を撮影しているうちに、疲労感が起こって、いつのまにか

眠り込んでしまった。

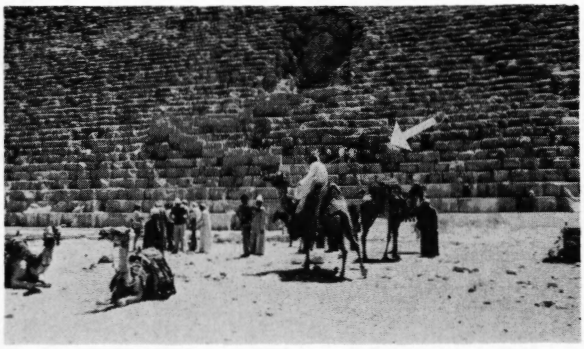
「ピラミッドですよ！」という田中氏の声に眼を覚まして前方を見ると、薄茶色の巨大な三角形の構築物が青空に浮かび上がっている。

「ついに来た！」

私は勇躍バスを降りた。ピラミッド前の広い砂地は各国から来た観光客でごった返し、多数のラクダがたむろして、ラクダ使いの男たちが、乗らないかと誘いかけてくる。

前夜ホテルで再会した早大エジプト考古学研究所の吉村作治先生が今日のガイド役として付き添って下さった。日本テレビと協力して現地にミニピラミッドを立てたときの指導者であり、発掘隊を指揮しておられるエジプト考古学の第一人者だ。このような方にガイドをお願いするのは光栄であり、私たちは緊張した。

●クフ王のピラミッドの入口（矢印）。上の穴は正規の入口。



クフ王のピラミッドへまず接近して、上方を見上げると、とてつもなく巨大なのに一驚する。この途方もない大建造物の重量感はそばで現物を見ないとわいてこない。写真などをいくら見てもだめだろう。

クフ、カフラ、メンカウラと三基並ぶなかで、右端のクフ王のものが最大で底辺各二百三十メートル、高さ百三十七メートルもある。一個平均二・五トンもある石を推定二百八十万個も積み上げるのに要した人間は延べ一億人以上、二十二年間かかったといい、この大ピラミッドだけでも解けない謎は二百種類以上あるという。まさにこの世のものとは思えない不思議な物体だ。一体、だれが、どのような方法で建造したのか？

私たちはまずクフ王のピラミッドの玄室へ入ることにした。正規の入口は上方にあるが、西暦八二〇年にカリフ（注＝マホメッド亡き後のイスラム帝国の最高指導者の称号）であったアル・マムーンがここを訪れて、火と酢と挺子を用いて堀らせたという坑道の入口が基底部から五段目の所にあり、ここから入るのである。

天井の低い水平のトンネルをしばらく進むと急勾配の正規の上昇通廊に出る。高さは約一・二メートルと低いので、四つんばいの格好で登らねばならない。足元には板がしいてあり、横木が一定間隔に打ちつけてあるから、すべる恐れはないが、おそろしく窮屈だ。しかも重いカメラバッグをさげている。天井に頭をごつごつぶつけながら上昇通廊を約三十七メートル登ると、急に大通廊へ出る。これも上昇通廊と同勾配だが、ここは天井は高さが八・五メートルあるので、今度は背を伸ばして登れる。これを四十七メートル行くと玄室へ着く。入口から計約百メートルほどトンネルをくぐった勘定になる。

玄室は奥行き十・四メートル、幅五・二メートル、高さ五・八メートルの花崗岩造りの広い部屋で、ひんやりとして不気味な感じがする。奥には石棺が一個あるだけで他には何もない。だが、これだけの部屋の空際でも上方からかかる数百万トンという途方もない荷重で押しつぶされるおそれがあるために、天井から上に五層にわたって花崗岩の巨石が適度な間隔を保って積み重ねられているのをハワード・バイスが発見して、これを『重量拡散の間』と名付けた。信じられぬほどの見事な設計なのだ。

しかし腹工合が悪くて数日、あまり食事をしない私はここでへたばりそうになってしまった。昨夜の睡眠不足に加えてトンネルを登った疲労が一挙に出て、しかも全身から汗が滝のように流れ落ちる。石棺の上に腰をおろそうとしたが、人がすわっているので、やむなく壁にもたれかかって快復を待つ。室内の壁を丹念に調べる気力もない。

やがて一同は玄室を出てトンネルの下降を始めた。私もよろよろと降りて行ったが、下りは少し楽だ。下方から各国の見物人が大汗を流しながら登ってくる。大通廊からふたたび上昇通廊の低い天井の下を体をくの字に曲げながら歩くと、また大汗がふき出てくる。

やっと外へ出て思いきり空気を吸い、一同と共にスフィンクスの方へ歩いて行く。強烈な太陽が容赦なく照りつけるなかをふらふらしながら皆さんについて行き、三基のピラミッドをバックに全員の記念写真を撮り終えたが、そのあと脱水状態に近くなり、体力の限界を感じた私は、一人でスフィンクスの前方にある大きなレストランに入ってジュースを飲んだ。そしてこの一杯の冷たい液体で全く蘇生の思いがして元気百倍したのである。ピラミッドも不思議だが人間の肉体も不思議な存在だ。消化器官がまだ吸収しないうちに、ジュースを胃の腑に落とし込んだだけでみるみる全身に活力がみなぎってくるのだ。

ピラミッド見学を終えた一同は、ふたたびバスに乗って、一時半頃ギザのホテル『メナハウス』へ行き、ここの大食堂で昼食をとった。すごく立派な建物で、吉村先生の話によると、この大食堂はサダト大統領とイスラエルのベギン首相とが会談を行なった歴史的な場所だという。

羊の肉が沢山出たが、私はあまり食べず、エジプトビールを少し飲んだ。臭みがあって、日本のビールとはまるで味が違う。しかしここでもゆっくり休憩して体調はすっかり元どおりに回復した。

午後の見学地はカイロから二十キロ南

のサッカラの砂漠の真っただ中にある階段状ピラミッドである。これは第三王朝のジェセル王の宰相であったイムホテプが、エジプトの古代文明において最初に築いた記念碑的な建造物で、以後、第四王朝のギザのピラミッドへと発展してゆくのである。

イムホテプ宰相は宇宙人？

吉村先生によると、このイムホテプという人物は驚くべき知識と技術を持つ不思議な人で、しいて宇宙と結びつけるならば、この人が宇宙人だったのではないかという。

バスを降りて砂上を歩きながらピラミッドの方へ接近する。六段になったこの王の墓は、高さ五十九メートルあり、巨石は用いられず小さな石灰岩を積み重ねたものであるが、さすがに四千六百年の風雨にさらされてボロボロだ。もっとも、ここは雨がほとんど降らぬ焦熱の地である。

説明を受けながらピラミッドの背後へまわり、小高い丘の上に立つと、一望千里、広大な砂漠の起伏が波のうねりのように展開し、遠くギザの方向に三基のピラミッドが夢のようにかすんで見える。すばらしい眺めだ。

もとピラミッドの周囲は壁で囲まれていたというが、今は神殿の一部と壁の一部が残るだけだ。神殿の内部に入ると見事な浮き彫りの壁画が残っている。タッチが荒くて写真で見るのとはかなり違う。

●サッカラの階段状ピラミッドを背景に

ここは訪ねる人もほとんどなく、静寂そのもので、一点の雲もない碧空のもとに褐色の砂漠が拡がり、悠久の歴史がそのまま語りかけてくるかのようだ。

「すばらしい所ですね。ギザよりもここのほうが好きですわ」と岡本さん（大阪市）が話す。全く同感だ。

しばらく休憩してから、またバスに乗り、一同はカイロへ帰った。

感動的な光と音楽のショー

夜は八時三十分にバスで再度ギザへ出かけた。今夜はピラミッドの『光と音楽のショー』を見ようというわけだ。これは三基のピラミッドを巨大なサーチライトで照らして夜空に浮かび上がらせるとともに、音楽を流すというショーで、必見にあたいすると聞いていたため、皆さんに誘いかけたのである。

スフィンクス前の大広場に椅子が沢山並べてあり、ここに各国人の観光客がすわって見るのだ。私たちが到着したときはすでに始まっていた。数百名の観客に混じって席を占めると、折からピラミッド群に次々と色光が投射されて、暗黒の夜空に美しく浮き上がる。夢幻的なすばらしい光景だ。音楽もよく、またスピーカーから流れるクィーンズ・イングリッシュの格調高いナレーションも絶妙である。英国人の相当なナレーターか俳優がやっているのだろうと思ったが、後に吉村先生から聞くと、果たして英国のシェークスピア劇団の一流の男女俳優が演じているということだった。正統的な演出効果がよかったのだと思う。下手に前衛的な演出をやると台なしになったことだろう。しかしナレーションはテープで流しているらしい。

このショーは日本で全く知られていないので、カイロを訪れる日本人はあまり見に行かないようだが、惜しいことだ。

感動に酔いしれながらバスでホテルへ十一時頃に帰り、そのあとホテル内のバーでガイドのモハメッド氏、田中氏と私の三人で語り合った。モ氏はカイロ大学で語学を専攻した秀才で、英・独・仏・伊語が話せるという。ここでは主として英語で話していた。一見三十歳なかばに見えるが、まだ二十二歳だと聞いて驚いてしまった。

翌二十四日は午前中自由行動なので、私は自室でゆっくり休息したり、洗濯をしたりする。私の部屋の係のボーイは四十歳ほどの薄汚いアラブ人で、最初は気味わるかったが、次第に善良な正直な男であることがわかってきた。チップを与えると大喜びする。いったいにエジプト人は貧しいせいか、何かの用事をさせると、その都度チップを欲しがる。日本人を金持ちだと思い込んで、よいカモにしているようだ。したがって前述のようにこの国では役人だろうが何だろうが、金次第でどうにでもなるらしい。このことは後日、再度ギザへ行ったときに立証された。

バザールの貴金属はニセもの？

さて、午後は一時よりバスでカイロ市内の旧市街見学である。まずモハメッド・アリ寺院へ行く。回教寺院としては市内最大のもので、大理石造りの大寺院は壮麗だ。回教徒は偶像崇拝をやらぬので本堂内に入ってもガランとしているだけだ。

次にバザール地区へ行く。無数の土産物店が密集する地帯の迷路のような小道をうろつきまわる。売っている品のどこまで本物かニセ物か見当がつかないのでうっかり買う気になれない。ホテル内の売店を経営しているアリ氏と親しくなったので、いろいろ聞いてみると、バザール地区の品物のうち、特に貴金属類はほとんどニセ物だということだった。

四時すぎにホテルへ帰り、五時半に、吉村先生とその助手である浦氏、田中氏とともにナイル河畔の野外のハト料理店

へ行き、ここで大いに歓談した。先生の話によると、遺跡見学に来る各国人のなかで、最もよく勉強して来るのはフランス人で、次がドイツ人。アメリカ人はだめで、日本人は写真を撮りに来るだけとのこと。しかし私たちのグループは日本人としてはまれにみるまじめな素直な人々の集まりだと賞讃された。豪放磊落、歯に衣きせずに卒直に話される方だからこれはお世辞ではないだろう。

ルクソールへ飛ぶ

二十五日は南方七百キロの地にあるルクソールの遺跡見学である。早朝五時半にホテルを出発するので、またも前夜はほとんど眠れない。七時半に空港を離陸して飛ぶこと一時間、八時半にルクソール空港へ着く。まるで砂漠の中の小さな飛行場という感じだ。

ここは古代にテーベと呼ばれて中王国と新王国時代に首都として栄えたが、全盛期は新王国時代の第十八王朝から二十王朝までであった。ナイル川をたてにはさんで、東岸側にカルナック神殿やルクソール神殿その他があり、西岸側にはハトシェプスト女王の葬祭殿、ラムセス二世と三世の葬祭殿、王家の谷その他の遺跡がひしめいている。

全部を見て歩く余裕はないので、吉村先生の代理の浦氏の案内で要領よく最初にハトシェプスト女王の葬祭殿に向かう。エジプト建築史上最高傑作のひとつと称されるこの建物は私のかねてからの期待の的であった。

だが現地に着いて、いささか拍子抜けした。意外に小規模なのだ。横幅が二百メートルもあるかのような印象を写真で受けていたが、実際はうんと小さくて、修復中のためか雑然としている。

だが高い岩山をバックに左右均整のとれた直線の多いスタイルはすばらしい。これは女王の臣下の建築家センモウトの作であるが、女王の死後、妾腹のトトメス三世は女王を憎み、ハトシェプストの肖像や壁画などをすべて抹殺してしまった。したがって男まさりの容姿は不明である。

葬祭殿前の広場を歩くとすごく暑い。四十五度あるらしい。しかし空気が乾燥しているので、日陰に入ると涼しい。

民芸品を売る土民たちが群らがってくる。不潔な連中なので気持がわるい。何度ことわってもうるさくつきまとう。メキシコのユカタンにも物売りの土民が沢山いるがこうまで執拗ではない。

次にバスで王家の谷へ行き、ラムセス六世の葬祭殿へ入る。レリーフの壁画が全く壮観だ。続いて隣接する名高いツタンカーメンの墓へ入った。見事な壁画に囲まれた奥の部屋に、十八王朝末に若くして死んだ少年王の金張りの第一人形棺がおいてある。すべて写真で見るとおりだ。一九二二年に英国人のハワード・カーターが発掘したときは盗掘を受けておらず、完全なままの副葬品が山のように出てきた。これらすべてはカイロの国立博物館に展示してあることはすでに述べた。

発掘時にツタンカーメン王の棺が出現したとき、その表面に一束の矢車草の花が枯れたまま置かれていた。これは当時十五、六歳だったと思われる王妃アンケスエンアーメンが王の死を悼んで最後に供えたのだろうといわれている。そして実に三千三百年間も遺体と共に地下に眠っていたのを執念の男カーターが発見したというわけである。まさにロマンティシズムの極致だ。その花束もカイロの博物館に展示してあるが、つい昨日まで生きていたのではないかと思われるほどに新鮮である。

その王妃も逝った。当時の関係者すべては地上から姿を消して、以来数千年間この墳墓内は歴史が停止していたが、タイムトンネルをくぐって逆行したのはカーターで、その発掘物語も実にドラマティックであり、シュリーマンのそれに劣らぬほど感動的である。

ああ、世は夢か幻か——てなことをつぶやきながら墳墓から外へ出ると、またも焦熱地獄。ロマンティシズムどころではない。あわててタオルを頭からかぶる。私の頭には毛髪がないから人一倍暑いのだ。

この王家の谷一帯は岩山だらけの炎熱地帯で、こんな場所に多数の墳墓を作ったのは盗掘を防ぐためだといわれている。こんな地獄の一丁目で三千数百年も昔に造営にかり出された土民たちはエライ目にあったことだろう。

体調がまたわるくなった私は、他の人たちが小高い丘を登ってセティ一世の墓を見に行ったあいだ、付近の大きなレストランで岡本さんと成瀬さんの奥さんとの三人でひと休みした。ここは冷房されており、冷たいミネラルウォーターを飲むと、生き返ったような気分になる。一杯の水が人体にとっていかに貴重であるかをここでも痛感した。

十二時半にレストランを出てバスでナイル河畔に着く。ここから渡し船で対岸に渡り、カルナック神殿へ行くのである。

多数の物売りの土民の一人が、あたりをキョロキョロ見まわしながら、もっともらしく懐からそっと古代の木片らしい物を出して見せる。本物の出土品を内緒で売ろうという仕草だ。見ると絵具で見事な絵画と古代エジプト文字が描かれ、裏は数千年を経過したような古びた厚い布で裏打ちしてある。絵柄からみて、レイアウトが実にうまくできている

●ハトシェプスト女王葬祭殿前にて

のを見ると、偽造品らしい。値段を聞くと百ドルだという。

「一ドルだ」と言うと、とんでもないという顔をするが、結局、あれこれ交渉するうちに相手は五エジプトポンドまで下げてしまった。いい加減なものだ。そこで五ポンドで買うことにした。

カイロに帰ってから浦氏にこの品の鑑定をお願いすると、これはひょっとすると本物かもしれないと言う。「しめた、これなら日本で十万円で売れる」と思っていたら、象形文字中の鳥の向きが違うので、やはりニセ物だろうということになった。しかしこんな偽造品はめったにないらしい。つまりこれは本物のニセ物ではなくて、ニセ物の本物なのである。

豪壮なカルナック神殿でへたばる

さて、私たちは渡し船でナイル川を渡り、ルクソール側へ着いた。ここにはバスがないので、奇妙なスタイルの幌馬車七、八台に分乗してカルナック神殿へ行く。馬車の乗り心地はあまりよくないが炎天下を歩くよりはよっぽど楽だ。

やがてカルナック神殿へ着く。これは古代テーベの主神殿で、十八王朝から二十王朝のファラオたちが神殿、オベリスク、神像などをアモン神に寄進した、エジプトで最も大規模な神殿遺跡である。

ラムセス二世寄進の参道を通ると、両側に羊の顔とライオンの顔を持つ四十頭のスフィンクスが並び、壮観だ。

第一塔門はプトレマイオス朝のもので高さは四十三メートルもあり、ここをすぎると左手にセティ二世の神殿、右手にラムセス二世の神殿がある。

こういうわけでカルナック神殿は一人のファラオだけではなく、歴代の王が次々と継ぎ足して拡張したものである。

第二塔門の前にはラムセス二世の巨大な石像が立ち、わが日本人旅行団を快く迎える。門をくぐると圧巻の『石柱の森』と呼ばれる場所に出る。

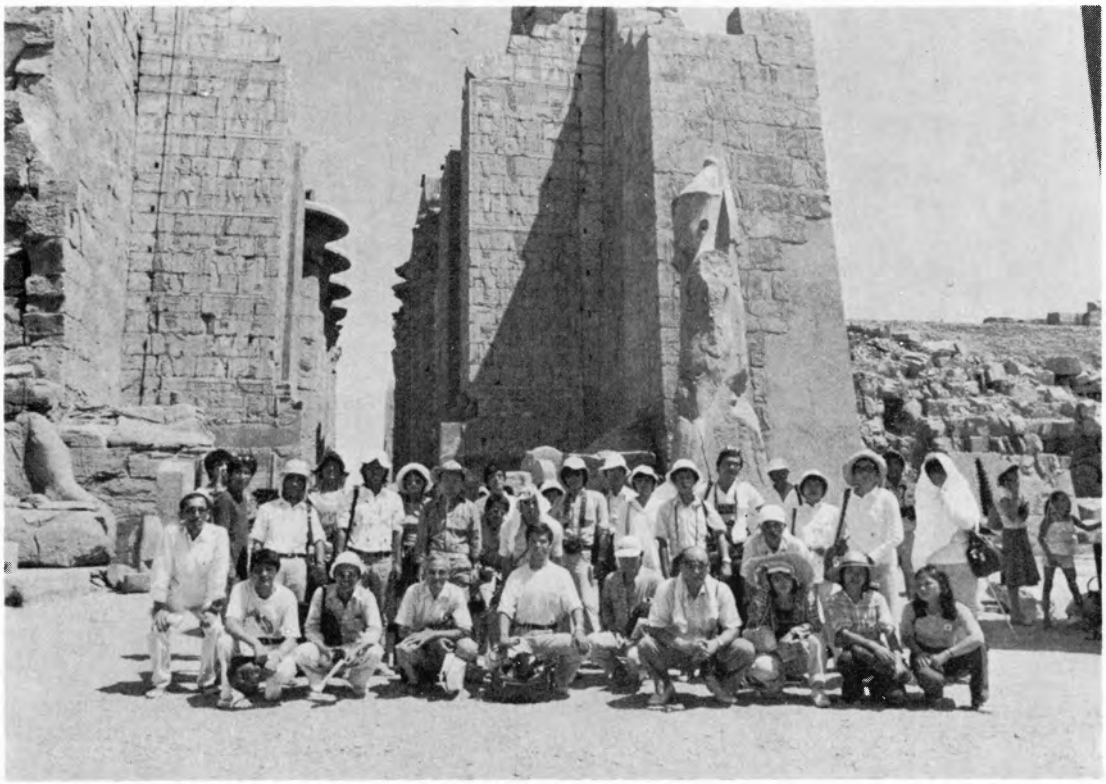
ここには径二メートル近くもある石の巨大な柱が林立し、圧倒的な景観を呈している。全部で百三十四本の柱が十六列に並んでいるのだが、特に中央の二列は高さ二十一メートルもあり、その上に三・三メートルのパピルスやロータスの柱頭が残っている。最初、これらの柱列の上部は天井で覆われていたらしい。

第三塔門と第四塔門のあいだがまた広場になっており、ここには昔四本あったといわれるトトメス一世のオベリスクが一本だけあり、第四塔門のむこうにはハトシェプスト女王のオベリスクも残っている。

超酷暑に加えて、巨大な柱の群れやオベリスク、塔門などに圧倒されてしまい、またもやへたばりそうになってきた。さすがに皆さん方も参ってしまったらしい。どの顔を見ても気息奄々たる有様だ。こんな巨大な石をどのようにして積み上げたのか、という推理や好奇心などは全く起こらない。もう一刻も早く退散したいだけだ。

さすがに浦氏も気の毒に思ったのか、引き揚げようということになり、ふたたび馬車に乗って東岸のサボイホテルへ行

●カルナック神殿にて，へたばる寸前の最後の記念撮影。前列右より4人目筆者。その左の野球帽姿が浦氏。



き、ここのレストランで昼食をとるも、気分が悪くて肉を食べず、一時間余休憩する。田舎にしては大きな立派なホテルで、他にも同程度のホテルが二、三あるという。

このあとルクソール神殿を見る予定だったが、全員の疲労と時間不足のために中止して、空港へ向かった。

ルクソールまで来れば、いかにも暗黒のアフリカ大陸という感じがして雄大な空気にひたれるが、一日だけでは充分な見学は無理である。また機会があったら、ここに二、三日滞在してゆっくり視察したい。

またUFOが出現して大騒ぎ！

五時頃にルクソールの小さな空港ビルに着き、ここから飛行機でカイロ目指して飛ぶ。上空から見るエジプトの大地は砂漠が果てしなく続き、広大な景観が展開する。

カイロに六時頃着いてバスでもとのホテルへ向かう。バスが市内に入る頃、田中氏がマイクで今後の予定を説明中、突然車内で大歓声がわき起こった。

「円盤だ！」

大騒ぎになったので、左側の窓から見ると、右斜め上方から八時の方向に旅客機が大きく飛んでおり、その右手の一時の方向に黒い物体が飛んでいるのが見えた。急いで倍率七倍の双眼鏡を出り出してのぞいて見ると、フランジを両方に突き出した黒い帽子型の物体が右方へゆるやかに滑空している。

「出たーっ！」

私は大声で叫び、カメラを取り出そうとしたが、やがて建物にかくれて見えなくなった。目撃時間は約十五秒ほどだったろうか。

この騒ぎで田中氏のアナウンスメントは中断されてしまい、気の毒だった。しかし氏も説明そっちのけで窓から外を見ていた。

この夜、カイロ市内の日本料理店『岡本』で全員そろって、エジプトの地における最後の晩さんを楽しんだとき、円盤の話が出て、合田みゆきさん（GAP会員・東京）が次のように語った。

「最初に発見したのは私と、うしろにいた膳氏でした。飛行機のそばに黒い物体がフワフワと動いていたので、『あれは何だろう』と言っているうちにまもなく皆さんも気づいて大騒ぎになりました。

あとで聞いた他の人の話によると、物体は一度急降下したそうです。私は物体が飛行機から離れるのを見ました。見かけ上は完全な円型ではなく、大体に三角形でした」

超能力を持つ遠藤君はその直前に円盤が出てきそうな予感がしていたという。鳥ではないかという人もあったが、私が双眼鏡で確認した限りでは両横に平たく突き出たフランジ状の部分は金属的なもので、カチッとした感じだった。

この夜の宴会は実に楽しくて、私のギターの伴奏で皆さんよく歌い、語り、飲み、名残り惜しく散会したのは十一時すぎだった。

ふたたびギザへ

翌二十二日はいよいよカイロと別れを告げる日である。しかし出発は夕方で、それまでは自由行動だから、午前中はまたギザのピラミッドを見に行く計画を立てて同行希望者を募ったら、なんと二十名近くいる。そこで売店のアリ氏に交渉して、マイクロバスを仕立ててもらい、これで行くことにした。この計画を知ったホテル直結の交通エイジェントの太った若い女性がうるさく干渉してきたが、結局ことわってバスで出た。

空は依然として碧く澄み、太陽は強烈だが、今日は体調が良いので勇躍ギザの砂地に降り立つ。一応解散して私は一人でクフ王のピラミッドの前面にまわり、カメラを向けて撮りまくった。

しばらくすると白いガラベイヤを着た背の高いエジプト人が出現して、自分は遺跡の監視人であると言い、懐から身分証明書を出して見せる。そして、面白い物を見せるから来ないかと片言英語で誘いかけてきた。ピンときたけれどもわざとだまされたような風をして、ついて行くと、巨石がゴロゴロしているあいだを縫いながら先導して、あるマスタバ（地下墳墓）の前に来た。入口の戸には錠がかかっている。彼は横の堀立小屋で寝ていた爺さんを叩き起こし、カギを持ってこさせて、戸をあけて中へ入って行った。私も入る。

スイッチを入れて暗い室内が照明されたとたん、あっと驚いた。見事な古代の壁画のレリーフが浮き上がり、おそろしく古い石像が数体壁ぎわに立っている。

「これはツタンカーメンの墓だ」と男は得意そうに言ってニヤリと笑う。こんな場所にツタンカーメンの墓などがあるはずはないが、相当に由緒あるマスタバらしい。

ここを出るときに男は、爺さんにいくらか金をやれと言うので、一ポンドを渡すと、爺さん、嬉しそうな顔をしない。

更について来いと言うので、また、あとを歩いて行くと、今度は別なマスタバへつれて行った。ここも内部にすばらしい壁画が並び、古い石像がある。これはカフラ王の墓だと言う。古代の有名人の名を出しさえすればこちらが喜ぶと思っているらしい。しかし貴人のマスタバであることに間違いない。照明をして、男は私のカメラをひったくり、その壁ぎわに立てば写してやると言う。二枚ほど撮影してくれたが、カメラ操作に手なれているところを見ると、しょっちゅうこの内緒のバイトをやっているのだろう。

ここを出てから、今度は巨石の間の谷間みたいな所へつれて行き、立ち止まって、十五ポンドくれと言うので、おいでなすったなと思ったが、冗談ではない、お前のほうから頼みもしないのに勝手に案内しておいて、金をくれとはなんだ、やる必要はない、と英語で断ると、相手は急にすごい眼付きをしてにらんだ。人気のない場所だから気味が悪い。

拒否し続けると、今度はニタニタ笑いながら、もう少し先へ行くとスフィンクスの横顔が見られるいい場所がある、そ

こを教えるから、ここで十ポンド出せとしつこくねばる。こんな男を相手にしていると暑くてしようがないので、思いきって十ポンドを与えたら、そのまま先導して、本当にスフィンクスの横顔の見える丘の上に出た。相手はそれみろとばかりニタッと笑って、私の肩を叩いて去って行った。

この場所はスフィンクス撮影の絶好の地で、プロの撮る写真でよく見かける横顔はここで写すらしい。ここでは思いきり撮りまくった。

付近のレストランへ行くと、テラスに岡本さんやその他の人たちがいた。数名の仲間がピラミッドの頂上まで登ったらしいと言うので、見上げると、たしかに数人の黒い人影が稜線を降りて来るのが眼に映った。よく警官につかまらなかったものだと感心したが、あとで聞くと、警官は何も言わなかったという。

れっきとした公認の監視人が内緒でマスタバを見せて金を取る国だ。万事が金で解決するのだから、だらしないこと、おびただしいが、のんびりしてユーモラスな感じもする。大地が焼けつくような暑気さえなければエジプトはすばらしい国だ。特に日本人には友好的である。

おそろしいほどに澄み切った碧空、乾燥した空気、回教寺院の尖塔群、ガラベイヤと白い頭巾とヒゲ面、汗と垢、黒い肌、ヤシの木、灼熱の砂漠、赤く大きな太陽、悪臭と喧騒に満ちた旧市街、泥の壁、ナイルの濁り水、巨大な遺跡、途方もない石塊、そして石塊——。

エジプトをついに私たちは離れた。

帰途、インドのデリーに着いたのは、夜間飛行後の翌朝二十七日の早朝であった。ここはエジプトと違って湿度が高いためにすごくむし暑い、東京の夏によく似ている。しかし一国の首都だというのに空港ビル内には冷房装置がなく、あちこちの天井に大きなファンがついて回転しているだけである。ビル内のレストランで朝食をとることになったが、どうしたわけか私たち数名のテーブルには食事を持ってこない。インド人ウェーターに英語で再三催促するのに、全く意に介しない様子で、何を考えているのか見当がつかない。結局、最後になって持って来たが、この雰囲気はメキシコやエジプトの底なしに明るい間伸びした陽気さとは違って、ここには一種の陰湿な空気が流れていることを感じたのである。そういえば周囲のインド人たちは意識的に日本人を無視しようとしているらしい。宗教のせいか国民性によるものかはよくわからぬが、日本人と打ち解けようとする気配はない。

空港を出てバスで市内観光に向かう。ところが真夏というのにこのバスにもクーラーはない。停車しているときは、まるで蒸しブロに入ったような暑さで、全身から汗が噴き出て来る。これでデリーに関する興味は薄れてしまった。

この国の経済事情や政治情勢などに精通しないで、わずか一日の観光で、とや

かくの批判はできないが、それにしてもこんな未開発の国に憧れる〝文化人〟が日本に多いという実状を何と解釈したらよいのか、私にはわからない。

最初にラクシミ・ナラヤン寺院を見学する。大理石造りだが、極彩色でケバケバしくて落ち着きがない。御本尊の像にも各種の原色が塗りたくってある。エジプトの荘重なモスクに比較すると全く異質的なものだ。おまけにこの本堂内もバカ暑くてかなわない。柳沢君（東大生・東京）などは上半身ハダカになってしまった。

サリーを着たインドの婦人たちが群れをなして参詣に来ては、本堂の床に大あぐらをかいて座り込んでいる。マンガに近い御本尊の神像を見ると、あのウパニシャッドの燦然たる宇宙的哲学はこうまで落ち込んだのかと思わずにはいられない。といって現代のヒンドゥー教なるものを偶像崇拝の最たるものだとあなどるわけにもゆかない。西欧のキリスト教にしてもその域を出ていないからだ。文明国人は文明と隔絶した世界に憧れやすいけれども、いずれにせよインドの神秘的な実態はもっと山奥へ入らぬと把握できないのかもしれない。

寺院を出てバスで市内をまわる。国会議事堂その他を見物するのに、とにかくバスの中が暑いので、涼風を求めて下車しては、ただ息をつくだけである。

どこかでバスが停車して外へ出たとき二、三の少年がやって来て、カゴを開いてから奇妙な笛で奇妙な旋律を奏でると中からコブラがカマ首をもたげて踊り始めた。エキゾティックというよりも白昼夢を見ているような感じがする。人間と動物との見事な一体化を強く認識したいところだが、やはりひどい暑気が思考力を低下させてただ呆然と眺めるだけだ。

大体、デリーに着いた頃、すでに数名の人々は下痢のために体調をくずし、この日の観光を中止してホテル・アクバールで部屋をとって休息した。それで私も昼食後はこのホテルで他の数名の人々とともに午後の見物をやめて、ロビーで休憩することにしたのである。

外資系らしい立派なこのホテルはさすがに冷房がきいて快適であり、大きなソファに座り込んでぐっすりと寝たが、これがよかった。これでもって体調が完全に快復して、以後はびっくりするほど食欲が出て、夜九時にデリー空港を離陸してからは機内食をすっかりたいらげた。

文明なるものを定義づけるのは私には困難だけれども、極端な精神主義がもたらしたインドの低次な現状は、少なくとも人間の発達に好適だとは思えない。一方、文明国人がこうした原始社会に魅了されるのは、なんのことはない優越感を意識したいという欲求のあらわれなのだろう。その意味では、文明国の旅行者を無視して貧困な生活に甘んじながら魂の向上を願うインド人のほうが上をゆくのかもしれないが、なにせ、わずか一日の観光では実状はつかめない。後日、夏季を避けてゆっくり滞在したいものだ。

成田空港へ無事着いたのは二十八日の昼すぎだったが、東京の蒸しブロのような暑さはまだ続いていた。

付記

十六日間にわたる強行軍だったが、実に楽しい旅だった。同行の皆さん方もよく協力されて、トラブルは一切なく、すべてが予定どおりに円滑にゆき、無事に帰国できたことは喜ばしい。一昨年のメキシコ旅行もすばらしかったが、今回は下痢が続いて体調をくずしたのは残念だった。しかし幸いにも高橋和美さん（会員・川口市）から正露丸をもらい、これを大量に服用して大事に至らずにすんだ。彼女に心から感謝したい。

大半の方はルールドの清浄荘厳な雰囲気を讃えていたが、パリとの訣れを惜しむ女性も多かった。ピアニストの池田玲子さん（会員・広島県）などは「パスポートを投げ捨てたい。このままパリに長期滞在処分を受けて居残りたい！」と言っていた。

暑さにはこたえたが、エジプトの神秘と謎とエキゾティシズムは私にとってたまらなく魅惑的だった。この愛すべき国へは何度でも行きたいと思う。親しくなったアリ氏から贈られた人造アレキサンドライトの指輪には同氏の善意が輝いており、これは今も愛用している。

同行の皆さん方が「旅行に出かけて良かった！」と心から嬉しそうに話されるのを聞くと、企画者としての望外の喜びを感じる。当初は参加をしぶった遠藤君も、私のすすめで引っ張られたかたちだったが、やはり行って良かったと喜色満面の体で語る。私もすすめて良かったと思う。

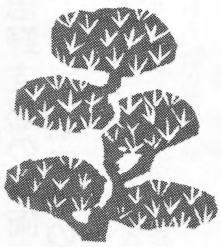
とにかく海外旅行は人間を大きく開眼させて、書物では得られない知識を与えてくれる。語学にしても、エジプト人のひどい英語を聞けば、日本人に大いなる勇気がわき起ころうというものだ。同胞の英語は決してわるくはない。外地では臆することなく堂々としゃべればよいのだが、わが旅行団の皆さんはかなり達者に英語を駆使していた。こうした機会も海外でこそ与えられるのである。

また、旅行中、私が個人的にやらかした無数のヘマ、失敗等も、反省すれば絶大なレッスンになった。

参加された方々はすべて立派な人たちで、団長たる私の不手際に対しても不平不満の声は一切出なかった。日本人としては第一級の人々であろう。

スペース・ピープルも大母船で宇宙空間を旅しては学習を続けているのだ。私たちも大いに旅をして人間を成長させたい。今年八月のアメリカ・中米の旅も、生涯最大の思い出として残るような快挙にしたいと思う。ふるってご参加のほどをお願いする次第である。

（掲載写真は筆者撮影。全員の記念写真は野口敏治氏が写す）



各地支部総会行事報告と予告

（78年10月以降分）

▼山形支部総会

十月八日、山形県県民会館。
午後一時より六時まで。
出席者三十三名。

清澄な秋晴れに恵まれて、第一回山形支部総会が開催された。当日は支部会員一同、午前十時から準備にかかり、献身的に活動してスムーズに定刻開会にこぎつけることができた。参加者は東北地方の会員の他に、愛知、静岡、東京方面からも多数の参加があり厚く御礼申し上げます。

午後一時、司会者山口緑氏の開会の挨拶が行なわれ、続いて私が支部の経過や久保田主宰者の経歴を述べる。

拍手に迎えられて久保田主宰者が登壇し、挨拶と講演「アダムスキー哲学と人生の幸福」に熱弁をふるわれた。講演は感傷的行為に走ることなく、相手も救われ自分も救われるという確信の必要性、将来、第三次大戦が発生する可能性があり、宇宙の意識との一体化を強調された。

次に「エジプト宇宙考古学遺跡の旅」のスライドが上映された。ルールドの聖泉やイタリア、ギリシアの神殿や宮殿群、エジプトのピラミッド等々がバックの音楽が流れる中、大画面に映し出され、時折代表のユーモアのある解説に笑いを誘われた。

そして、記念撮影、休憩、質疑応答と進行し様々な質問や話題が出され、すばらしい雰囲気の中、午後六時に総会を終了しました。

夕食会は和やかな空気がみなぎる中、会話を交わす人、写真を撮る人、楽しく会員間の交流が深められた。

翌日も秋晴れに恵まれて、午前九時会員十名と共に先生を御案内して、紅葉で美しい蔵王山へ出発した。山頂のお釜、ダリア園を見学し静かな一時を過ごして夕方特急で帰京された。会の準備、運営に不備な点があった事をお詫びします。遠方から参加された会員の皆様、運営に協力してくれた支部会員の方に感謝申し上げます。

（漆山記）

山形支部総会は小人数の集会なるも、すばらしい会合だった。会場の準備は至れり尽くせりで、関係者各位のこまやかな配慮がゆきとどき、全く申し分のない楽しい雰囲気に満ちていた。千葉・東京静岡方面からも参集した方々もあり、どらかというと東京と山形との合同総会という感じだった。

前夜のホテルの食堂で遅くまで語り合い、総会終了後は夕食会で談らんし、更に別な場所で語り、翌日は快晴の中を車三台に分乗して蔵王へドライブし、すばらしい紅葉とススキを観賞したりレストランで語り合ったりして、愉快な一日をすごした。山ろくの蔵王温泉はフランスの田舎町を思わせる美しい町で、また山形駅前の近代的な発展ぶりに、これが東北かと認識をあらためた。

とにかく個人的に親しく接して語り合うことの重要さを地方へ出るたびに痛感する。東京では超多忙なために会員の方々との接触は困難だが、せめて地方の会合等でなるべく談話の機会を持ちたい。

山形へ向かう列車内ではずっと本誌用のア氏の記事の翻訳仕事をやりながら乗っていたが、帰途の列車内もこれを続けた。途中、食堂車へ入ってある体験を持ったけれども、これもよいレッスンになった。

お世話になった漆山、山口、その他の各氏に深甚の謝意を表したい。（編者）

▼習志野支部の映画と音楽の会

十一月十七日（日）午後一時より千葉県習志野支部（臨時結成）主催の映画とレコードコンサートの会が同市屋敷公民館で開かれた。出席者は約二十名。タタミ敷きの広い部屋で昨夏のエジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅（間嶋泰行氏撮影）の8ミリ映画を編者の解説で一時間半ほど見たあと、遠藤昭則氏製作の月面写真スライド映写が行なわれた。これは月面に不思議な物体が存在するのを発見したという氏の研究を公開したもの。最後に編者持参のレコード、グスタフ・マーラーの「交響曲第三番」の後半を山木益巳氏自作のステレオにより大音響で鑑賞して深遠壮大な音楽に陶酔し和気あいあいたる空気のうちに五時閉会した。

六時からは別会場で忘年会を兼ねた夕食パーティーを開催し、なごやかに談笑したが、一部の有志は深夜二時半まで宇宙問題、音楽、人生問題等について語り合った。

（編者）

▼東京本部 新年パーティー

一月十三日の月例会終了後、六時より上野駅そばのスキ焼店「竹弥」にて新年パーティーが開かれた。七階の貸切り大広間を埋めつくした参会者は約六十名に達し、編者の乾杯音頭により、全員乾杯後、飲み放題、食べ放題により満腹感を味わいながら各テーブルとも談論風発、次々と歌も出て、にぎやかなパーティーは九時に終了した。

（編者）

＝予　　告＝

日本GAP静岡支部総会

●日　時　昭和54年5月6日(日)午後1：30より
●会　場　「静岡市民文化会館」2階会議室
　　静岡市駿府町　TLE 0542—51—3751
●会　費　500円

——プログラム——

1：30　司会のことば
1：35　講演「アダムスキー哲学によって救われる方法」久保田八郎
2：30　休憩・記念撮影
2：45　スライド「エジプト宇宙考古学遺跡の旅」
4：45　休憩
5：00　質疑　久保田八郎
5：30　閉会
6：00より7：30まで希望者による夕食会（同会館内3階の「レストラン駿府」にて)。会費1,500円
問合せは野口まで。0542—86—7729

＝予　　告＝

日本GAP岐阜支部大会

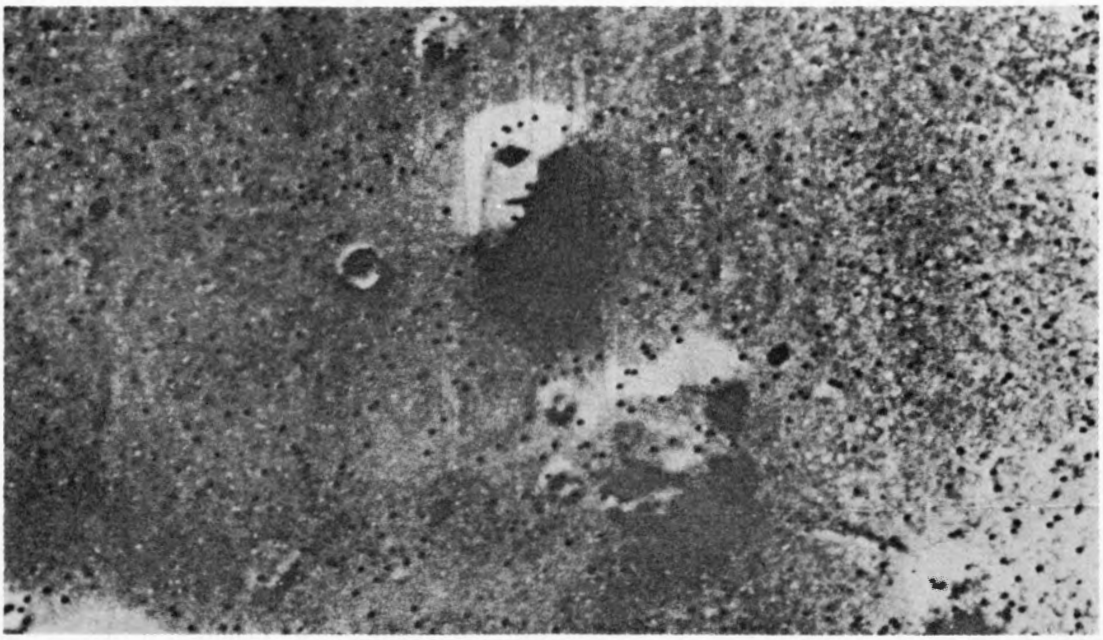
●日　時　昭和54年3月18日(日)午前9時より
　　午後4時まで
●会　場　岐阜市神田町2丁目「岐阜商工会議所」3階第4会議室。
　　電話 0582—64—2131
●会　費　300円

——プログラム——

9：00　挨拶　松尾和也
9：15　講演「永遠の生命を得るには」松尾和也
10：10　〃　「自我の変換」片　　京
11：05　〃　「ア哲学と良きカルマ」久保田八郎
12：00　休憩
1：00　スライド「エジプト宇宙考古学遺跡の旅」
3：00　質疑　久保田八郎
4：00　閉会
5：00より8：00まで希望者による夕食会を岐阜駅南口の「ヤマトレストラン」で開催します。会費2,500円
問合せは松尾まで。0582—51—8567。

●火星人の顔？

●1978年8月，アメリカの火星探査機バイキング1号が火星表面から1,873㎞の高度で撮影した写真に巨大な人間の顔らしきものが現われた。天然の岩山による偶然の現象か，それとも人工的な建造物か——。顔の高さは 1.5㎞あるという。（ベルギーGAP提供）



会員の声

投稿歓迎。「会員の声」宛と記し適当な用紙を使用。タテ書き。字数自由、匿名可。但し住所本名明記。

変化のための基本

仙台市　笠原弘可

総会の大成功をまず御喜び申し上げます。並びに打ち上げ夕食会にて素晴らしいひとときを過ごせました事に心より感謝致します。

夕食会の時の先生の言葉に「アダムスキー哲学の真随を見る思いだった」とありましたが、まさにその通りに感じました。その際中、無作法にも初めて言葉を交わす遠藤さんにオーラの事をずけずけと聞き、思い返すと失礼な事をしたと反省しています。

先生やホワイティング氏、一昨年はステックリング夫妻等と同席して常に湧き起こるのは、やはりレベルの高い人と接しなければいけないということです。言葉にならない教訓を受けましたが、一つ二つあげれば盲信ともいうべき信念の重要性、恐怖が人間の主になっている等、「生命の科学」その他でよく教えられていることですが、ホワイティング氏の講演で〝変わるためにそれが重要なのだ〟という印象を再確認した次第です。

高二以来六年間、ア氏を信奉しているという以外なんの長所もない凡人の私が、やはり何度も何度も心に刻まねばならない「変化のための基本」をホワイティング氏が教えて下さったような気がします。参会者各人が各々に必要な教えが総会に含まれていたと思います。

さらに夕食会では各支部の代表の方々との交流が持たれ、昨年以上の成果があったと思います。時間に制約がなければ、いつまでも腰を上げたくない思いにかられ、本当に感慨深き会でした。

何はともあれ本当に御苦労様でした。今後もまたお体に気をつけて御活動下さい。御気付きの点あれば何なりとご指導の言葉をお待ちしています。

（仙台支部代表）

意識眼で見よう

山形県　山口　緑

先日は総会並びに夕食会に御招待にあずかり誠にありがとうございました。この日ほど私が生きることの重要さについて考えさせられた日はかつてありません。特に素晴らしい夕食会に招かれた何よりの好機に絶大なる祝福を感じています。私のような田舎青年があのような高貴に発達された方との中のひとりとして居られたことは実に不思議であり、夢のようでありました。久保田先生、ありがとうございます。一緒に食事されたひとりひとりがみんな私の友であり師であるようなフィーリングが強烈に湧き起こり、何か生まれかわってゆく自分を感じずにはおれなかったのです。

私には過去を透視することもオーラを見る能力もありませんが、ホワイティング氏も語られた通り、過去世において同じようなパーティーを開いたことがあったような気がします。多くのすばらしい方々と席を同じくしておりますと、私が腹の底から猛烈に真に生きるフィーリングが活性化されるのを感じ、体全体が宇宙的想念によって浄化されそうでした。

最後にホワイティング氏と握手をかわしたとき、息のつまる爆発的フィーリングと愛に包容されるのを感じずにはおれませんでした。氏の鋭く、万物を愛によって見透す瞳は、たとえようがありませんでした。私は非常にラッキーです。都合により先に失礼しましたが、腹の奥底から名残り惜しさがこみあげて、どうしようもありませんでした。とにかくこうした輝かしい光栄に浴する特権に感謝いたします。

宇宙の意識の中に溶け込むこと、宇宙の英知をすべての創造物の中に認めることの重要性を痛感し、実感しました。帰宅後、万人万物を見る際に、意識眼でもって見ようと自らを謙虚にし、感覚的にしますと、私の顔が歓喜で満たされ、理解に満ちた溢れるよろこびになっているのに気づきます。これはすばらしいことです。そして無限の能力が今にも発現するという強烈なイメージが湧き起こってきます。

このフィーリングは絶えるものではありませんが、この辺で失礼します。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。がんばります。ホワイティング氏にもよろしくお伝え下さい。（山形支部代表）

すばらしかった総会

横浜市　熊沢田鶴子

先日の総会においてスティーブ・ホワイティング氏の素晴らしい講演を聴くことが出来、心から感謝致しております。前日はザーザー降りの雨でしたのに、次の日は雨も上がって本当にGAPの日は主の祝福に満ちていると感じざるを得ません。

私の感じましたところ、二人位のスペース・ブラザーズが来ていたように思われます。ホワイティング氏の講演を聴いていますと、考え方やその他すべてに対してこの地球上の人とは思われない程、高度な魂を感じます。きっと氏はすぐ前の過去世において他の惑星にて地球で行なうGAP活動に対して、地球人にわかりやすく納得させるためのあらゆる知識を勉強されてきたのだと思います。

講演中、通訳をして下さっている久保田先生のうしろにアダムスキー氏がいるように感じました。去年はそんな感じがしなかったのですが、今年はホール内全体が一つの宇宙船内、ちょうどアダムスキー氏が母船内で偉大なマスターと会見した時のような、そのマスターがホワイティング氏であるような気がしました。

フレッド・ステックリング氏撮影の8ミリ映画には感動しました。私達日本人にとっては、まして私やもっと年少、その他の人々にとってはアメリカという国が遠い国なので、わざわざデザート・センターまで出かけられ、アダムスキー氏が遭遇した状態を模型を通して再現され、示して下さいました。この事は私達人間に対する最高の愛情の表現だと思います。そしてこの映画の不思議なところは、画面にもかかわらず私の意識もステックリング氏と一緒にセスナに乗り、現場まで行ったことです。砂の上に立ってあたりをながめどこか上空からブラザーズが降りて来るのではないかと本当に心を躍らせました。

ホワイティング氏の質疑応答にて熱心に答えて下さいましたのは、何ともお礼の言いようがありません。年少の方にもわかりやすく説明をされ、転生や意識についてくわしく教えて下さいました。

それから私にとって不思議なことが起きました。総会へ行く前に風邪をひいてカセットテープを買いそびれました。やむなく録音済みのテープを持っていったところ、初めの二巻は前の録音が全て消えてホワイティング氏の声を録音することができました。ところが三巻めの始めにB面から録音したところ、この面はテレビの録音を入れてあり、消したくありませんでしたが、他にテープがないので使用しました。家へ帰り、何となく不安になりました。というのは何も声が入っていないのでは？と思いましたが、何とテレビの録音が消えず、ホワイティング氏の声と多重録音になってしまいました。今迄カセットテープレコーダーを買って四～五年になり、よく使いましたが音が重なったのは初めてでした。こんなことは通常でもよく起こるのでしょうか？　私にはそれがとても不思議でした。

アダムスキー氏のことですが、以

前に夢で握手を交わしたことがあります。GAPの月例会のように教室に机をならべて人々がアダムスキー氏の話を聞いています。久保田先生も廊下側の椅子にすわられ、講義を聞いています。その内容はわかりませんが、すわっている人々の中にはアダムスキー氏を信用していない人々がいるように感じられます。講義が終わってアダムスキー氏がわざわざ部屋をまわって、人々に質問を聞いてあげたり握手をして下さいました。でも思ったほどには握手をする人が少ないのです。私は自分から握手を求めました。アダムスキー氏は微笑して私と握手をして下さいました。その手が大きく、赤子のようにしっとりと柔らかで、とてもあたたかかったことを今でもはっきりと、まるで現実に握手したかのように覚えています。これは私にとってアダムスキー氏からの最高の贈りものだと信じています。

総会の日、久保田先生は風邪をひかれていたようでしたね。早く治して元気になって下さい。この総会に出席できましたのは先生やその他の方々の強い愛情と努力が実を結んだものと思います。あらためて心から感謝し、お礼をのべさせていただきます。そしてこの内容を生活に生かし、よりよい社会を作るための努力をしていきたいと思います。主の祝福がこの会を盛大にされた先生、ホワイティング氏、スペース・ブラザーズ、その他すべての人々にありますように。

講義録音テープを頒布

今年度東京月例会における久保田先生の毎月の「生命の科学」解説講義一時間分の録音テープを頒布します。希望者は頒価一〇〇〇円、送料一四〇円を添えて左記へお申し込み下さい。

〒二七四　千葉県船橋市前原西8—5—18浜村達郎

大母船を目撃！

鎌倉市　田中千夫

一九七六年十月十日、午後十一時二十分、三十分、四十分と三回、オレンジ色の直径七～八mの光球を見てから（この件につきましては後程細かく記して御送りいたします）、連日のように近くの山、そして鎌倉逗子ハイランドの小高い丘にある貯水池に通いました。この丘から米軍弾薬貯蔵地の上空を、多くのオレンジ色の球が飛んでいるからです。これは監視の為のヘリコプターらしいのですが、中には山の上の米軍監視所から赤いサーチライトが、その上の飛行物体に発せられるということが数回ありました。その赤いサーチライトで監視所の建物が見えなくなる程です。応答のない飛行物体に対して赤いサーチライトを発するそうです。UFOだと思います。

この光を観察するために、毎日のように鎌倉逗子ハイランドの小高い貯水池に行いました。

一九七六年の大晦日の夜から一九七七年の元旦にかけても、寒い中、左眼下の鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の多くの人々の騒ぎを耳にしながら、正面のオレンジ色の光を観察しておりました。私の参拝する〝神〟は〝マスター〟だと思ったからです。

一九七七年一月二日午後六時頃、小高い丘であるこの鎌倉逗子ハイランド貯水池にまいりました。曇天のため星の光は見えず、静かでした。

正面に、特に「白銀色の霧」が地上から約百四十mの高さまでありました。よく観察しますと、サラサラと細かな水滴がゆっくりと流れ落ちる感じでした（図1）。

午後八時頃、一個のオレンジ色の光る物体がその霧の上部に入っていきました。飛行機かなと思っていました。午後八時三十分頃、私はそのオレンジ色の光点が霧を通過して出てくるのがあまりに遅いので、「あの飛行機、どうしたのかな」と思った瞬間、白い霧の上部からヌーと機首が出てきました。巨大な母船の先端です（図2）。

その先端を下降させながら機体の横腹をまざまざと見せつけていました。白銀色にギラギラと輝く機体でした（図3）。

機体の形はフットボールで使うライスボールのようでした。両端がとがっており、長さは二百m弱、高さは四十m強です。翼やプロペラや突起物のような付属物はありませんでした。機体には五個の直径十四m弱程の丸窓があり、中は真っ暗で、人影は見えず、何の音も聞こえませんでした。

あの霧の上部に入って出てこなかったオレンジ色の光点はUFOで、母船に格納されたのだと思います。以上、地球人類の造った物ではないと思います。

やがてゆっくりと傾いたままで大船方面に飛んでいきました。以上、証人がおります。

私が観察できた原因としては、異星人がいると確信していた事、「異星人様、マスター、連れて行ってください。学ばせてください」と念じ続けていた事、UFOに乗せてもらうのに捨身である事、連日のように鎌倉逗子ハイランドの貯水池に通って観察していた事などの熱心さにあると思います。

田中千夫氏のスケッチ

（距離・大きさ等を精密に分析した第4図は省略）

テレパシー

福井県　柳原信一

私は小学六年の頃からテレパシー能力が現われていたのだと今になって思う。当時は一言か二言ぐらいまで伝わったようで、たいして気にもとめなかった。ところが最近になってテレパシーで相手と話ができるほどに能力が高まってきているように思われる。しかし残念なことに私が意図して相手に話しかけた場合に通じる率が少ないのである。どのような場合に通じるかというと、テレパシーを意識しなくて、頭の中でひとりごとを言っているときに、もし誰かが私に関心があって私の想念をキャッチし、私の言っていることに対して相手が受けこたえする。その現象が今まで何回となくあり、その本人はいつもきまって私は誰と話をしていたのかと自問自答する。

私がUFOに関心を持つようになったのはこのテレパシーのおかげである。去年の十月午後八時三十分頃なにげなく夜空を見上げた。一番明るい星をながめていると、驚いたことに一直線にゆっくりと動いて行った。このときはUFOは存在するかもしれないという程度の認識しかなかったが、人工衛星か流れ星にしては速度が遅すぎると考え、まさかUFOではないだろうなと思い、半信半疑で「UFOなら降りてこい」と何度もつぶやいた。この時上空からテレパシー(?)が入ってきた（以下略）。会員になってまだ日が浅いのですが、福井県在住の会員の方、御連絡下さい。

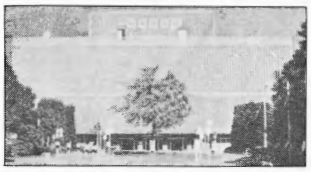
予告
先は長いが計画は周到

昭和54年度日本GAP総会

ベルギーGAP主宰者
キース&メイ・フリットクロフト夫妻による

大講演会開催

世界屈指のUFOと宇宙哲学研究大集団が放つ今年度の巨弾



本年度日本GAP総会にはヨーロッパきってのUFO研究家、ベルギーGAPリーダーで、アダムスキーに親しく師事したキース&メイ・フリットクロフト夫妻を招待して大講演会を開催いたします。会員の皆様のために来日してヨーロッパのUFO研究事情、アダムスキー問題や宇宙開発等に関する素晴らしい話題や秘話を公開する夫妻の高次なスピーチをぜひお聴き下さい。

★主　催　日本GAP
★日　時　昭和54年11月23日(金曜日・祭日) 10時より。
★会　場　都内・皇居・北の丸公園内「科学技術館」地下大ホール
地下鉄東西線「竹橋」下車。毎日新聞社ビル前の竹橋を渡って徒歩3分。
★会　費　¥3,000 (当日受付でご納入下さい)

プログラム

10:00→10:15　開会の挨拶……久保田八郎
10:15→12:00　講演「アダムスキー問題と宇宙開発」……キース・フリットクロフト
— 昼食休憩 —
1:00→3:00　講演「ヨーロッパのUFO事情、ベルギーGAPの活動とアダムスキーの思い出」……メイ・フリットクロフト
3:15→5:30　スライド映写「パロマー山、米GAP本部訪問、デザートセンター見学その他200点以上」……久保田八郎
(今夏の「アメリカ・中米宇宙考古学の旅」より)

〈ご注意〉
●会場の受付は午前9時より開始します。　●ホール内での喫煙・飲酒・食事はご遠慮下さい。
●昼食は休憩時に会館内の地下食堂(セルフサービス・安価)か他の場所ですませて下さい。　●再入場する場合は必ず胸にリボンをつけること。
●テープレコーダー、カメラ持ち込み可。但しストロボ・フラッシュの使用は厳禁。録音内容やスライドの複写を他の刊行物に掲載しないこと(版権は日本GAPが所有)。
●控室へ不意に侵入したり、ホール外の場所で夫妻をつかまえて質問をあびせることはご遠慮下さい。

歓迎大パーティーを開催!

当日総会終了後、フリットクロフト夫妻歓迎大パーティーを下記の要領で開催します。会員の参加自由につき、ふるってご出席下さい。

とき　6:30→9:00(立食形式。料理・ビール・酒・ジュースをたっぷり準備。椅子も多数用意)
ところ　東京駅・丸の内側南口構内「精養軒」2階ホール(100名まで可。南口改札所に向かって右手奥)
注意!　駅の外ではなく駅舎内ですから間違えないように。八重洲側ではなく、東京駅の丸の内側(皇居側)です。
会　費　¥4,000(パーティー会場でご納入下さい)
申　込　会場準備の都合上、パーティー出席希望者は、「フ夫妻歓迎パーティー出席」と記して、ハガキで10月末までに日本GAP宛ご一報下さい。

お願い

日本GAPは創立以来十八年を経過し、今や世界屈指のUFO・宇宙哲学研究の大集団に発展しました。これもひとえに皆様方のご支援のたまものと深く感謝いたします。

現在は米国ジョージ・アダムスキー財団との密接な連携のもとに国際的な活動を遂行しておりますが、発展化にともなって各種の行事企画等に相当な出費を要し、会費の徴収のみでは運営が困難となり、ときに支障をきたすこともあります。今年十一月にはベルギーGAPリーダー、フリットクロフト夫妻を招待して大講演会開催を予定しておりますが、この経費に最低百万円を要しますし、その他の行事や活動等にも不測の出費を要することが予想されます。

つきましては恐縮ながら日本GAPの維持のためにご寄付をたまわりたく、伏してお願い申し上げる次第です。

いかにすばらしい理想主義活動を展開しようにも、先立つ物がなければ行動不可能というのが地球の掟であり、しかも本会は営利事業ではありませんから、会員の皆様のご協力を仰ぐ他に方法はないのです。よろしくご賢察の程をお願い申し上げます。

※ご送金の場合は「日本GAP維持協力」とのみ記して、必ず振替をご利用下さい。なお恐縮ながら会費とは区別させて頂きますのでご了承下さい。

日本GAP

満員御礼！

日本GAP企画第1回

「アメリカ中米宇宙考古学の旅」

先号で発表しました上記の旅行企画は大反響を起こし，参加申込者は1月下旬で定員を突破，50名に達しました。厚く御礼を申し上げます。

なお定員40名を超過しても**60名までは**OKですから案内書未入手の方は切手140円を添えて日本GAP宛，また参加希望者は5万円を添えてワールドセブントラベル社の田中氏宛至急お申込み下さい（昼間は03—499—2461，夜間は0462—24—8738へお電話を）。戸籍抄本・住民票等は後日で結構です。4月下旬に参加者のみの第1回説明会を開催しますが，日時場所は個々に通知します。

日本GAP

（16頁より）

するとマネージャーは、年輩の一紳士と二人の婦人が一緒にホテルにいたことを思い出し、二人の婦人が席をはずしたあいだにバチカンから来た人が年輩の紳士としばらく話していたと回答したのである。

さて、翌日の土曜日の正午、アダムスキーと一緒にいたとき、彼は法王から贈られたという美しい黄金のメダルを私たちに見せてくれたが、これは立派な皮ケースに入っていた。数年後にデスモンド・レスリーがそのメダルの写真をローマカトリック教会の一高僧に見せたところ、そのメダルはめったに人に与えられるような品ではないと相手が答えたという。

土曜日の午後、私たちはローマに立派な家を持っている、デスモンドの兄のキャプテン・レスリーを訪れてハイティーのご馳走になった（訳注＝これは肉の一品料理のつく夕方のティー）。このとき居合わせた客人たちは非常に洗練された人々であったけれども、アダムスキー氏は気楽な態度でくつろいで、一同の信用を得たのであった。

アダムスキー氏はその場にいた一画家とその作品のことを話し、ある作品を描きあげたときに本人がどんな気分であったかを言い当てた。またその人の性格も正しく分析した。これはアダムスキーがどんな集まりの中にいてもくつろげることのできる一例であり、だれとも話し合える能力を示したものでもあった。

日曜日には、イタリアのコーワーカーであったアルベルト・ペレゴが彼に会って、長時間話し合った。

法王の健康状態に関して絶えずニュースが流れたが、ついに訃報が出たのは、私たちがアメリカへ帰るアダムスキー氏を空港で見送る前の、六月三日の月曜日だった。

一九六四年の四月と五月には、私は前の夫（訳注＝逝去されたモルレ氏）と共にビスタのアダムスキー氏の家を訪問して、ふたたび哲学について語り合うことができた。私たちは長時間話し、多数のテープに録音した。

一九六三年の旅行でアダムスキー氏がヨーロッパへ来る前に私はベルギーの王室と接触し、エリザベス皇太后にアダムスキーの最初の著書を送っておいた。そして皇太后は彼と会見することに同意したのである。しかし残念ながらアダムスキー氏が到着する直前に皇太后は病気になり、彼に会うことはできなかった。

以上、私は一九五九年と六三年の旅行中に起こったさまざまの出来事や、アダムスキーという人物について概略を述べた。しかし彼の仕事はまだ終わっていない。それは現在もなお強力に続いており、国際間の協力にまで発展している。

編者付記

右の記事のうち、サン・ピエトロ寺院その他の部分で本誌前号に掲載された対話と若干食い違う個所がある。これは非常な早口で話すメイ夫人の話を、事情を全く知らない通訳嬢が勘違いして編者に伝えたと思われるので、その点を了解されたい。右の記事中の話が決定版である。

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　時	会　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2：00→6：00	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。電話（828)2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り，奥のエレベーターから4階へ行く。	¥ 300	テキストとして「生命の科学（文久書林刊)」を持参。2：00→3：00「生命の科学」講義，3：00→4：30主宰者挨拶・報告，テレパシー練習，休憩。4：30→6：00自己紹介，研究発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝片　京0720—31—5646	200	テキストとして「宇宙哲学」（たま出版刊)」「テレパシー」を持参。東京例会における久保田主宰者の講演テープを公開。
高知支部	毎月第1日曜日 午前10：00→	高知市桟橋通り2—1—55 「青年センター」電話（31）4931 連絡先＝橋詰利光0888—42—3884	100	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」 電話 0252—44—6766	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の「テレパシー」講義録音テープを公開。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後2：00→5：00	熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。電話(55)5235。国鉄「熊本駅」前から市電「健軍」行き乗車，「お城前」下車，同交差点左折，徒歩2分。 連絡先＝津野田俊行 0963—52—3381	100	テキストとして「テレパシー」（文久書林刊)」を持参。2：00→3：00 久保田主宰の東京例会における「テレパシー」講義録音テープ公開。3：00→5：00自己紹介，座談，質疑応答。
福知山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	福知山市「福知山市民会館」2階会議室。駅前から右方向の道路を直進し，2つ目の信号機の所。電話0773—22—9551 連絡先＝仲間秀樹　0773—22—4340(呼)301号，平日は18：00～22：00まで	100	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」，久保田主宰者の講演録音テープ公開，自己紹介，研究発表，座談会。
岐阜支部	毎月第3日曜日 午前9：00→12：00 **※本年3月18日(日)岐阜支部大会を開催。**	岐阜市神田町「商工会議所」電話（64）2131。国鉄または名鉄「岐阜駅」下車，徒歩10分，バスか市電で「柳ケ瀬」下車，近鉄百貨店を北へすぐ近く。 連絡先＝松尾和也 0582—51—8567 **大会の詳細は本号35頁を参照。**	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田主宰者の講演録音テープ公開。支部長松尾氏による「生命の科学」解説。質疑応答，座談。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可 0222—29—4305 田中義則 0222—46—1350	200	東京本部月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午前10：30→3：30	上山市「労働福祉会館」2階会議室。電話02367(2)6082。月岡公園入口より左側へすぐ。 連絡先＝山口　緑 02367—9—2555	200	テキストとして「テレパシー（文久書林刊)」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第3日曜日 午前9：00→12：00	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。電話011—241—9171　連絡先＝伊藤重信 011—251—4331	100	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30 **※本年5月6日(日)静岡支部総会開催。**	静岡市民文化会館 連絡先＝野口敏治　0542—86—7729 **総会の詳細は本号頁を参照。**	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	設立準備中	詳細は〒071—13旭川市末広6条4丁目，石川公一宛連絡のこと。自宅0166—51—5699　職場0166—23—3165		

★本誌バックナンバー(旧号)★

米GAP本部公認の唯一の日本支部たる日本GAPがアダムスキー問題に関して正確詳細なインフォメーションを伝える本誌は貴重な資料として後世に残るものです。

No.58 (残部僅少)主要記事「進歩した思索家のために」 G.アダムスキー／米GAP本部訪問記(2)「きらめくビスタの星」(2)及び「青きパロマーの空」 久保田八郎／その他。

No.59 (残部僅少)主要記事「進歩した思索家のために(完)」 G.アダムスキー／米GAP本部訪問記(完)「さらばニューイングランド」 久保田八郎／「透視された謎のクリスタル・ペンダント」中里信彦／その他。

No.62 (残部僅少)主要記事「スペース・ブラザーズはなぜ来るのか(完)」 G.アダムスキー／メキシコ紀行「太陽と神々の国を訪ねて」 久保田八郎／その他。

No.64 主要記事「エゴを支配する道」 G.アダムスキー／「人間とは何か」 F.ステックリング／「ジョージ・アダムスキー財団について」 S.ホワイティング／「心は静電気か」 浜村謙郎／「ヨハネ黙示録解読試案(2)」 遠藤昭則／「UFOと日本人」 久保田八郎／その他。

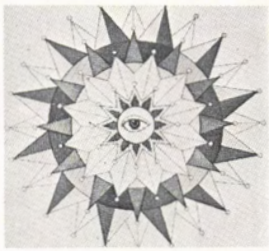
No.65 主要記事「UFO問題の真相(1)」 G.アダムスキー／「バミューダ海域の謎」 F.ステックリング／「超能力開発法(1)」 亀田一弘／「幻影と巨石の国へ(1)」 久保田八郎／その他。

●上記各号共¥300 〒200　但しNo.58, No.59, No.62は各20部程度しかありませんので，この3種類に限り必ずハガキでご注文下さい。代金は到着後払いとします。No.64, No.65は振替でご注文下さい。

—日本GAP—
振替・東京4－35912
(久保田八郎個人名義)

①

②



①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500 〒100 ②¥200 〒50 一括注文の場合 〒100

編集後記

★遅くなって申し訳ありません。個人活動として限度に達しながらも66号の発行をみたことを喜ばしく思います。会員各位のご支援に厚くお礼を申し上げます。わずか四十頁の小冊子ながら、これに要する原稿は約二百枚。レイアウトその他も全く編者が独力で遂行しており、編集企画から発刊まで約二ヵ月を要し、その間、個人的な職業(文筆業)は中止という実状をご賢察下さい。

★本号は原稿が輻湊して、アダムスキー氏の「UFO問題の真相」、亀田先生の「超能力開発法」その他の記事は休載のやむなきに至りました。玉稿を連続寄稿される亀田先生には全く恐縮ですが、次号には一挙掲載し、総会時のホワイティング氏の「質疑応答」も全部載せますので、ご期待下さい。

★今夏実施予定の「アメリカ・中米宇宙考古学の旅」は予想以上の大反響を起こし、一月中旬ですでに定員四十名に達しましたが、提携旅行社によれば五十名までの定員オーバーはOKとのことですから、希望者は39頁の要領に従って至急お申し込み下さい。今夏は大人数のため、にぎやかな素晴らしい旅行が実現するでしょう。

★アダムスキーを虚偽ときめつける自称コンタクトマンがスイスにいるそうですが、米GAP本部及び日本GAPは一切無視しています。サイレンス・グループの本拠地たるスイスのことですから、おどろくにはあたりません。また、これに関して報告したという元GAP会員の言動についても当方は一切関知しません。

★米GAP本部によれば、シャーロット・ブロップを中心とするグループは米GAP本部とは全く無関係であり、アダムスキーの正統後継団体ではないとのことですから、これもご留意下さい。

★「光る雲」と題する無記名のパンフレットが会員間に配布されているそうですが、これは日本GAPとは関係ありません。このパンフレットにアダムスキーの写真類が無断で使用されていれば、版権侵害行為となります。

★「日本GAP福岡支部」なるものは存在しませんから、ご了承下さい。

★諸般の事情にかんがみて、いずれ日本GAPを社団法人化し、法の保護の下に強力な体制を敷くべく会員たる弁護士の先生その他有力会員と検討中です。デタラメが罷り通るのを拱手傍観して道理を引っ込めるのが"愛"ではなく、適当な処置を講じる必要があることを痛感するこの頃です。

★いずれにせよ混沌たる世の中ですが、最強力な武器は"信念"といえます。盲目的信念ともいうべき(これはいわゆる"盲信"とは違います)鉄のような意志が必要で、感傷的な愛や単なるお人好しは、とかく愚劣と狂気に蹂躙されがちです。要は真実の愛プラス徹底した信念にあるといえるでしょう。

★信念となれば編者は人後に落ちません。アダムスキーの支持活動を日本で最初に開始して以来二十年余、その間の困難は言語に絶するものがありましたが、信念の火はますます熾烈に燃えさかり、磐石不動の態勢にあります。ただし問題は資金です。これさえあれば強力な活動を展開できますので、本号39頁の趣旨をご了解の上、よろしくご援助のほどをお願い申し上げる次第です。(K)

——次号予告——

UFO問題の真相(2)	G.アダムスキー
質疑応答	S.ホワイティング
転生について	F.ステックリング
超能力開発講座(2)	亀田一弘
信念は願望を実現させる	久保田八郎
ヨハネ黙示録解説試案	遠藤昭則

その他有益な記事を満載の予定。
発行月日は未定。

GAPニューズレター 66号
Jan. 30 1979
頒価500円・送料200円

編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365—818
電話(651)0958
振替東京4—35912(久保田八郎名儀)